禅文化歴史博物館セミナー講演録

黄檗禅の伝来と曹洞宗諸師との道交

―近世曹洞宗の活性化を促進させた黄檗宗―

吉田　道興

はじめに

長崎唐三箇寺（興福寺・福済寺・崇福寺）は、隠元来朝以前、一般に「瑜伽教寺」と称され、道教・儒教と仏教が融合し、僧侶は『叢林両序須知』類を用い、信者に対し「修習瑜伽集要施食壇儀」等を使い、先祖供養・子孫繁栄等の祈祷儀礼を行い民間信仰が浸透していた。

「黄檗宗」の名称は、①隠元の渡来、承応三年（一六五四）以降近世末まで「臨済正宗」と称し、日本で禅宗の一派として活動が開始された。次に②明治七年「教部省達書」により「臨済宗黄檗派」、③明治九年、臨済宗より独立し「黄檗宗」と呼称し現在に至っている。本稿において「黄檗禅」とは、黄檗宗の宗教と文化全般を含む諸現象と活動を指す意味で用いる。

以下、黄檗禅伝来後、曹洞宗は黄檗禅に傾倒した洞門僧たちを中心に、法灯重視の「宗統復古」運動の惹起、「黄檗清規」の浸透から「古規復古」運動の展開、「黄檗戒壇」の盛況に刺激を受け洞門授戒会の普及、僧侶間における序・跋・偈類の文化交流、さらに正面向きの頂相・明様式伽藍・墨蹟の流行等が生じたのである。それらの一端を論述し、紹介したい。

次に本論の章にゴシック体を一律に付したのは、文脈の中で重視すべきことを表した。また傍線をほどこした箇所は、各章の中で留意すべきことを示した。

本　論

第一、「宗統復古運動」について　―その背景と経過―

一、洞門の「宗弊」と「復古」思想の発生

（1）室町時代頃から曹洞宗における師資間の法灯相承が混乱

「嗣法」（人法）が寺院の引継ぎに別の師匠の「嗣法」を重ねて受け継ぐ「伽藍法、重受」、また師匠が没し他師が仲介し代わって授ける「代受」、墓塔に礼拝して「嗣法」する「拝塔嗣法」など、「嗣法」の乱れによる弊害が生じていた。江戸時代になり、その「宗弊」を嘆き、道元禅師の古風にかえるべく「革正」「復古」を願う人々が現れてきた。

（2）「伝法公事」　人法と伽藍法とが齟齬をきたした顕著な事例

承応元年（一六五二）、総寧寺英峻（一六七四没）は伽藍脈を伝えず永平寺へ昇住。総寧寺の後住となった松頓（生没年不詳）は引継ぎなく永平寺へ昇住した英峻を他山であるとして世代を脱牌した。そのため英峻が寺社奉行へ訴えると、公儀（幕府）は松頓に「弁駁書」を提出させ、龍穏寺以下十箇寺に諮問させて、英峻の永平寺昇住は他山でも悪例でもないとし、松頓は津軽へ「御預け」の身となった。待遇は頗る寛大で付き添いの沙弥一人、十人扶持を与えられた。その後、永平寺住職は「関三刹」から選任し昇住する制度になっていく（『洞門政要』第四篇雑録第一章）。

（一）

（3）中国明代の仏教事情

明代の仏教は、三教一致（儒仏道同源）思想が主流である。そうした中、禅宗においては法系重視の気運が遠門浄柱撰『五灯会元続略』（以下、『続略』と略称）順治五年序刊〔曹洞宗の系譜を明確化〕と費隠通容撰『五灯厳統』順治一〇年刊〔『続略』批判、無明慧経・無異元来等は嗣承未詳〕との論争が惹起。明代の弘治から嘉靖年間（一四八八～一五六六）にかけ編纂された宗典は誤謬が多く、後学を迷乱させるため、邪説を刪り古徳の旧案を採り類聚した〔永覚元賢撰『洞上古轍』「序文」崇禎一七年刊〕と述べ、原典回帰・「復古」思想が発生していた。

（4）日本の「革弊」思想先駆者の代表格独庵玄光の憂愁

独庵玄光（一六三〇～九八）は、来朝した道者超元（＊～一六六〇）に師事し指導を受けていた。著書『護法集』の中で「此土の禅林凋弊」として義解の弊と文字また失の弊に陥り（延宝六年〈一六七八〉刊。「自警語下」、六一八頁）、実状は「今世支那日本の乏しい所は無師自悟、天然外道なり、今日支那日本の余りある所は有師無悟、紙伝払伝、群を成し、隊を成す禅師なり」（元禄三年〈一六九〇〉刊。「俗談上」、六三二頁）と批判を展開し、さらに「金を奉じ払を請う、院を以て嗣を易える者に与かる、皆化僧の弊風。豈に沙門の為す所ならんや。（中略）予、時輩今日の非礼を按ずるに元祖の清節漸に陵夷し、末流の澆風漸に薫染す。之と化して其の非を知らずして然るなり。後生須らく元祖の高蹤に遵じ、元祖の峻節を持つべし（中略）今日、院に随い師を易えて、廉なく恥なく禽獣の如し」（同右、六四三頁）と慨嘆している。

また独庵は、永覚元賢（一五七八～一六五七）・為霖道霈（一六一五～一七〇二）を「支那明眼大善知識（中略）沙門の英気を具す真実参禅者」（『護法集』「独庵独語」六〇三頁）と評し、雲棲袾宏（一五三五～一六一五）と永覚に対し「古道を今世に行ず（中略）二師の著述、句句誠語、語語宗を失せず、大いに海棗の談と異なり、真に末世の薬石、予の仰ぐ所なり（中略）邪骨猾を矯正し、法門を擁護す」（同六〇七頁）と賞賛している。永覚の法嗣為霖が独庵撰『独庵独語』に「序」を寄せ、宗風の道が宋季より次第に衰え、仏法が暫時下っていると指摘し、その弊害を救うため、独庵の当該書を反覆して読むと、彼の心は即ち古徳の心、その志もまた古徳の志であり、時により弊を救い、正法を護持すること（趣意）を期待している。

（二）

二、「宗統復古運動」の先駆者

万安英種（一五九一～一六五四）は、元和八年（一六二二）、總持寺に瑞世後「宗風の衰廃」を深く嗟嘆し、「同志の六、七人と門を閉じ打坐することおよそ六年」（『続洞上諸祖伝』巻四「興聖寺万安禅師伝」）と述べられている。

連山交易（一六三五～九四）は、元禄二年（一六八九）大中寺に晋住した際、「院に依り嗣を易える流弊を憂う（趣意）」（『洞上聯灯録』（以下、『聯灯録』と略称）巻一二・『続日本高僧伝』巻六「沙門交易伝」）とある。

独庵玄光は、天和三年（一六八三）刊「独庵独語」と貞享三年（一六八六）刊「独庵稿」、元禄三年（一六九〇）刊「俗談」に「因院易師」「紙伝払伝」等の語句を繰り返し用い弊風を指摘、本質的嗣法の必要性を強調している（『護法集』巻一・五八七、六〇三、巻四・六三二～四、六四二～三、巻五・六四六、巻十・七二九等）。彼の思想形成は、前述のとおり、まず道者超元に師事、次に為霖との交流（文通）、永覚・雲棲の著述（公案・講義否定等）に強く影響を受けていることが判る。

三、「宗統復古（宗弊革新）運動」の推進者

先駆者の意向を受け卍山道白（一六三六～一七一五）・梅峯竺信（一六三三～一七〇七）が主導し、宗門内外の人々の賛同を得て、寺社奉行所に訴え**元禄一六年（一七〇三）八月に幕府より「一師印証、面授嗣法」の裁決が下る。**

裁決の翌一七年、月坡道印（一五九三～一六八〇）は、洞門の「弊風」に対し皮肉を込め辛辣に批判、永平の宗旨を認得すること、三物は紙絹葛布として形式的な人法・伽藍法に対し、いずれも強く批判し、「賦」一詩（七言律詩）を作っている（『南去北来』巻三・横関『洞門政要』八〇九～一一頁所載）。独庵の「嗣法観」である本質的実参実究と卍山の形式的「嗣法観」は根本的に相違する。その後「拝塔嗣法」、「大陽・投子嗣承」（面授か代付か）、「三物論」論争が多発した。筆者は、教団史の

広い視点で『永平寺史』「宗統復古運動」において、それらを使い論述している。以下、紙面の都合で裁定前後の関係文献を補足的に列挙しておきたい。

□裁定以前の関係文献（抜粋）

独庵撰『護法集』「俗談」元禄五年、濫嗣の弊風慨嘆／梅峰竺信撰『洞門劇譚』元禄一三年、弊風分析／定山良光撰『正法嫡伝獅子一吼集』元禄一四年、「拝塔嗣法」擁護／桂林崇琛撰『獅子一吼集弁解』元禄一五年、卍山の面授嗣法を重視。

□裁定前後、「大陽・投子嗣承」論争〔A「親授説」・B「代付説」。C「総括論」〕

A、卍山道白撰『正法眼蔵面授巻』跋文、元禄一三年、『洞門衣袖集』正徳元年／面山瑞方撰『洞上金剛杵』元文三年、『雪夜爐談』元文四年〔本文冒頭〕公音（午庵）道鏞「書独庵和尚俗談後」／大了愚門編『永平紀年録』延宝六年／乙堂喚丑撰『洞上叢林公論』寛保元年／宜黙玄契撰『禅林甑瓦』同上。

B、徳翁良高撰『洞門亀鑑』元禄一六年／梅峰竺信撰『林丘客話』宝永三年／天桂伝尊撰『参洞契毒鼓』・『宝鏡三昧金鎞』享保六年／無得良悟撰『洞上仏祖源流影讃』元文元年／万回一線撰『青鷂原夢語』元文五年（天産霊苗「序」・丹山梅蘂「跋」）／玄楼奥龍撰『一槌砕瓦』天明四年（天保一四年刊）。

C、田翁牛甫撰『感応護国徙薪論』正徳三年、宗弊革正の強訴実践記録。三洲白龍編『宗統復古志』宝暦十年、弊風の分析と復古の軌跡を整理。

参考文献

栗山泰音『嶽山史論』第一八章「嗣法の次第と寺統の次第」、第一九章「元禄一師印証史の真相」、鴻盟社、一九一一年。

横関了胤『江戸時代　洞門政要』第四篇雑録、第一章第二節「伝法公事」第三節「法灯粛正運動」、東洋書院、一九七七年。

吉田道興『永平寺史』下巻、第七節「宗統復古運動」、大本山永平寺、一九八二年。

鏡島元隆、第一部「総説」（1宗学勃興の歴史的背景、2宗統復古運動と嗣法論、3古規復古運動と清規論、4授戒運動と禅戒論）・吉田道興「三、曹洞宗と臨済宗・黄檗宗との交渉」（『道元思想のあゆみ3』曹洞宗宗学研究所編）吉川弘文館、一九九三年。

吉田道興「独庵玄光の嗣法観とその背景」（『独庵玄光と江戸思潮』、ぺりかん社、一九九五年。

第二、『黄檗清規』の盛況と曹洞宗への影響　「古規復古運動」へと展開

□『黄檗清規』と『椙樹林指南簿（清規）』について

隠元隆琦（一五九二～一六七三）撰『黄檗清規』は、寛文一二年（一六七二）に刊行、その後実践された。ここでは、その構成や内容等は省略する。それ以前、大衆は、これとは別に中峰明本（一二六三～一三二三）撰『幻住庵清規』を重視、また寛文二年刊『禅林課誦』や『（国清寺）二時課誦』、『（霊巌山寺）念誦儀規』類は、浙江省など中国各地で修され、浄土「念仏」や密教の「陀羅尼」を行じていた様子である。

鏡島元隆先生は、月舟宗胡（一六一八～九六）撰と伝えられる「山門規約」（＝『雲堂常規』「規誡十五条」延宝二年（一六七四）撰、惟慧道定・黙玄元寂の参画、「題椙樹林指南簿」）は、『黄檗清規』規誡十二条の影響を受けていること、それを師月舟より卍山道白に委嘱され、享保一二年（一六七二）に『椙樹林清規』（内題「椙樹林大乗護国禅寺清規〔指南簿〕」）を撰述〔天和二年（一六八二）の重修『椙樹林清規』〕した（『曹洞宗全書〔以下、『曹全書』と略称〕解題』一五二～四頁）とされる。

面山瑞方（一六八三～一七六九）は、『黄檗清規』（明規）により侵食されていた月舟撰『雲堂常規』や卍山撰『椙樹林清規』に対し、それらを「弊風」として排斥するため永平寺住持大虚喝玄〔製作中に遷化〕、継いで円月江寂に委嘱され、輪住地の三河龍渓院や自坊の若狭空印寺等にて威儀作法を検証した上、宝暦三年（一七五三）撰『僧堂清規行法鈔（実践編）』五巻と宝暦五年撰『僧堂清規考訂別録（考証編）』八巻を刊行した。特に修行の中枢部である坐禅・寝食を兼修する道場「僧堂」から分離し「禅堂」と「斎堂」へと名称および修行内容を変えたところに根本的問題があったと思われる。

『椙樹林清規』の「弊風」として例えば『考訂別録』巻一の「朝課諷経」を粥前に行う、巻二の飯作法において牀上に立地坐具を敷く、巻三の「浄髪〈長鬚長髪長爪〉」「開浴法〈坐具携帯〉」、巻四の土地堂念誦の紙銭紙馬、巻五の「結制人事附両展三拝〈明規の雲集唱礼〉」「鳴法器附木魚梆雲板〈三八念誦に大鐘七下、斎堂前飯梆と二頭接身団形の木魚〉」、巻六の「仏祖会行法〈上堂三請〉」、「諸職法〈僧堂の司、堂司供司童行〉」、巻七の「喪法〈六方龕・八方龕、挙哀〉」、巻八の「警策〈明様笞〉、禅杖〈本来〉」等、これはほんの一例であり、このほか枚挙に暇がないほど「永瑩二規」に背く「弊風」が多数あると指摘している。

典型例として、肥前菩提寺七世天瑞万琦（＊～一七〇六）の伝記には「当山に喬遷して、専ら檗規を行ず」とあり、彼の住持時代において『檗規』（黄檗清規）を行じていた（『菩提寺世代伝』）ことが知られる。それは、時所が限定的なものか、その後どのように経過し終息したのか等、その実態を伝える資料がないのは残念である。また宇治興聖寺の『鑑寺寮日用記』年中行事（元禄期以降）に「黄檗開山忌」四月三日（寛文一三年当日の「遺偈」萬福寺蔵）が設定され、友誼として興聖寺衆僧が黄檗山へ拝登している事にも留意しておきたい。

なお玄透即中（一七二九～一八〇七）は、寛政五年（一七九三）撰『（岡山）円通応用清規』の自叙にその「弊風」に触れ、穏達の註・玄透の序跋を付した『冠註永平清規』（寛政六年〈一七九四〉）に「祖規復古」の意向を固めていた。それが玄透撰・尼貞順輯録『祖規復古雑稿』（寛政八年刊）にも収録され、文化二年（一八〇五）刊に『吉祥山永平小清規』として結実し、さらに天保九年（一八三八）刊、黄泉無著撰『永平小清規翼』に補充されていく。彼らは面山と同調して「古規（祖規）復古運動」を実践し展開していったのである。

なお注目すべきことは『祖規復古雑稿』中の「上官衙書」（寛政七年八月）と「永平寺再建僧堂告諭文」である。「上官衙書」は「宗統復古運動」の時に行われた幕府への裁定を願う官訴と同様のものと推測できるが、詳しくは不明である。『黄檗清規』の撰述後、享保一二年（一七二七）に成立した東皐心越（心越興儔）撰『寿昌清規』（天湫編）八章の構成（梵行・普請は欠）は、概ね継承していることを指摘するに留め、論述は割愛する。

参考文献

樽林皓堂「月舟の雲堂常規と黄檗清規」（『印度学仏教学研究』五―一、一九五七年）。
山口晴通「『椙樹林清規』の性格と意義」（『宗学研究』六、一九六四年）。
鏡島元隆「『椙樹林清規』解題」（『曹全書解題』、一五二～四頁。一九七八年。
鏡島元隆　第一部「総説」（3古規復古運動と清規論）、小坂機融「（三）清規論の展開」（『道元思想のあゆみ3』曹洞宗宗学研究所編）吉川弘文館、一九九三年。
熊谷忠興『永平寺史』第七章「古規復古と玄透即中禅師」第三節「永平寺古規復古」、大本山永平寺、一九八二年。
尾崎正善「『椙樹林清規』の『黄檗清規』受容について―『洞上僧堂清規考訂別録』の批判を通して」（『曹洞宗研究員研究紀要』二三、一九九二年）、同右「『椙樹林清規』について―瑩山清規との比較において」（『宗学研究』三四、一九九二年）、同右「『椙樹林清規』に関する一考察―瑩山清規との比較において（二）」（『宗学研究所紀要』五、一九九二年）、同右「『椙樹林清規』と『黄檗清規』―『黄檗山内清規』の紹介を中心として」（『印度学仏教学研究』四二―一、一九九三年）、同右「『椙樹林清規』と『黄檗山内清規』―『雲堂常規』との比較」（『宗学研究』三六、一九九四年）。

（四）

第三、「黄檗戒壇」に登壇受戒した洞門僧

曹洞宗出版部編『曹洞宗近世僧伝集成』（以下、『僧伝集成』と略称）に所載する洞門僧侶の諸伝記により黄檗戒壇に登壇受戒した僧侶を抜粋し列挙してみよう。〔人名の冒頭に付した＊は篤信者〕

大鏡宗円（＊～一六八〇）黄檗山木庵性瑫に参謁し戒珠を円にす、再度江戸紫雲山瑞聖寺木庵に参訪。『貞祥寺開山歴代略伝』「十二代大鏡宗円禅師」。

卍山道白（前出）　隠元、木庵に参謁、『鷹峯和尚年譜』寛文九年条・木庵『年譜』天和元年条。独湛性瑩、独照性円、潮音道海に参訪、『卍山広録』各巻。寛文十年

（一六七〇）頃か、木庵の黄檗戒壇にて受戒（卍山撰『対客閑話』中に語る。『曹全書禅戒』七頁）。

丹嶺祖衷（一六二四～一七一〇）寛文七年（一六六七）冬、木庵の結制に助化、翌年黄檗戒壇に受戒。『大陽開山丹嶺禅師紀年録』（『曹全書史伝下』）。

行巌雲歩（一六二八～九八）寛文年間（一六六一～七三）、木庵に就き黄檗戒壇にて受戒したことを述懐。『豊鐘善鳴録』巻二「豊後州能仁寺行巌禅師」。

黙玄元寂（一六二九～八〇）明暦元年（一六五五）、黄檗山木庵に参謁、寛文一〇年（一六七〇）春、黄檗戒壇に受戒（大戒を円にす）。『円応開山黙玄禅師行状』。

＊惟慧道定（一六三四～一七一三）隱元、道者に参謁。寛文五年（一六六五）二月、木庵の黄檗戒壇にて具足戒を受く。その際、独本性源から隱元所附の念珠を贈呈される。後日、複数回の戒会を興行。『徳巌惟慧和尚年譜』。元禄三年（一六九〇）二月、岐阜善応寺にて黄檗式「戒会」の戒源師を勤む。参照【後掲資料】

明堂正智（一六三五～七三）発心寺住持時代に木庵に参学、黄檗戒壇にて「大戒」を受け（年月不記）、問答商量し「偈」を贈られる。『長昌寺明堂智禅師伝』。

＊徳翁良高（一六四九～一七〇九）鉄眼道光の楞厳経を聴講、独湛、隱元に参謁。木庵の黄檗戒壇に受戒（満分戒）。『西来徳翁高和尚年譜』寛文一〇年条。延宝元年（一六七三）一〇月、潮音の「戒会」に「引請師」を勤む。月舟に「永平の裔か」と諌められる。元禄九年（一六九六）、雲山愚白と共に卍山に謝罪、『年譜』。後日、徳翁は大乗寺の世代を脱牌されている。

＊無得良悟（一六五一～一七二九）隱元、鉄眼、独照、独湛、潮音に参謁。鉄牛道機と道交。二三歳（寛文一二年か）、木庵の黄檗戒壇に登檀受戒。『太寧無得悟老和尚行業記』。

＊隱之道顕（一六六三～一七二九）元録二年（一六八九）、独湛、独照、高泉性潡、鉄牛、慧極道明、潮音に歴参。この頃、黄檗戒壇に登檀受戒か？『瑞光隱之和尚年譜』。『隱之道顕和尚語録』「上堂語」（下総東昌寺・武府妙喜寺・武蔵瑞光寺）に黄檗式「三壇戒会」の影響が垣間見える。

□近世の洞門「血脈戒壇」＝「直授菩薩戒」

卍山は、延宝八年（一六八〇）、大乗寺において「始めて禅戒会を建てる」。「我が月舟老人、大願力を以って前古式に依り**血脈戒壇**を建つ、天童永平の旧儀を今日に観るは、豈に我門の大幸にあらざらんや（中略）客又云わく、然りと雖も黄檗派下の三壇戒、其の弘戒法儀の記述する所、丁寧鄭重、又誰か遵行せざらんや。予云わく昔木庵和尚に謁して、其の戒壇に登りて親しく受儀を領授し丁寧鄭重、汝の云う所の如し。然れば大宋所伝の禅戒式には非ずして、太明洪武年中（一三六八～九八）の撰次する所、大小通受の新規則なり」（『曹全書禅戒』、『対客閑話』六～七頁）と黄檗戒壇の体験を述懐している。

□「黄檗三壇戒」・『弘戒法儀』に対する洞門僧の批判

石雲融仙（一六七七～＊）撰『叢林薬樹』巻上には、卍山の『対客閑話』を引用し独庵門下の旗幡を建て、彼の禅戒論や三宝物互用、喫煙、眼蔵『面授』巻の刊行を批判し反駁している（『曹全書解題』解説黒丸寛之、一二七頁）。

＊甘露英泉（生没年不詳）撰『尸羅敲髄章』享保九年（一七二四）刊において黄檗の「三壇戒」と三峰法蔵〈寒月〉撰『弘戒法儀』天啓三年〈一六二三〉と比較し、隱元編『弘戒法儀』明暦四年〈一六五八〉刊に関して「隱元、三峰製式を盗み、私に蛇足を加え、誣言なり」（『曹全書禅戒』、八〇～八五頁）と述べ批判している。

＊玉洲大泉（一七三九～一八一四）撰『説戒略要』（刊行年不詳）の「檗派三段戒并叢林薬樹弁」において、「此に禅戒略談有り。作者名を詳らかにせず、只書は写本なり。其中或師良悟禅師か曰く禅戒儀規、天童永平の所伝と謂うと雖も、吾未だ初祖この戒を以て二祖に付し、五祖この戒を以て六祖に付すを聞かず（中略）これによりこれを観るに月舟・卍山の造作するところ、信用に足らざるなり。師也曽て黄檗派下三段戒を専らにす。吾が禅戒を信ぜず、怪しむべし」（『曹全書禅戒』四八四頁）とある。さらに「又曽て檗派一員の知識、明より着たりて長崎に在る日、曰く、我、鼓山為霖禅師に依随し、親しく伝戒を得るなり。生死無常、この戒本を伝付せんと欲す。奈何にも其人乏し。遂に洞門晧台会裏に天瑞長老を招き、親しく

（五）

伝付し畢る。天瑞、後に河州経山に住し、此の戒本を奉持するなり。所謂、雲棲伝来の戒本にして檗派弘戒法儀と異なれり。想うに木庵は祇だ永覚の所において衆と受くるのみ。然らば木庵、豈に伝戒儀有るを知らざらんや。知りて之を犯すは是れ盗法と為し、是れ私曲と為し、是れ忍ぶべきや、孰か忍ばざらんや。西来徳翁和尚、月潭禅師を嵯峨直指庵に訪ね、一夜談話に因み、潭が謂って曰く、黄檗派弘戒法儀、其の序を見るに則隠元禅師の所撰なり。其の説戒の語を見るに、則ち怪しむべき語すくなからず。未審、元の所撰なるや否や。潭曰く、然らず。支那黄檗に三峯という者ありて、伝来の戒本と私説を増添し改めて弘戒法儀と為し、彼方で専ら之を行う」とし、以下、卍山撰『対客閑話』の所述に反駁している石雲融仙の『叢林薬樹』を引き続き批判（同上四八四～六頁）している。文中、嵯峨直指庵月潭は『幽谷余韻』所載「直指庵記」（『続曹洞宗全書（以下、『続曹全』と略称）寺誌』所収）の月潭道澄であろうか。『曹全書語録二』（『卍山広録』四〇五頁）。

□山口大寧寺痴絶伝心が美濃善応寺「戒会」を『**弘戒指南**』として記録する文書がある。その中で惟慧道定が戒源師を勤めたと記している。これと連動する資料『瑞光隠之和尚語録』とを併せ黄檗宗と曹洞宗の「授戒会」との関係を近日行われる宗門の学術大会で発表する予定であり、本稿では割愛する。

参考文献

吉田道興『永平寺史』下巻、第六章第六節「禅戒研究」（論書の羅列）、大本山永平寺、一九八二年。
黒丸寛之「一、近世における道元禅の展開、（一）嗣法論の展開」・渡部賢宗「（二）禅戒論の展開」（『道元思想のあゆみ3』曹洞宗宗学研究所編、吉川弘文館、一九九三年）。

第四、黄檗禅に傾倒した代表的洞門僧

『僧伝集成』に所載する黄檗禅に傾倒した洞門僧を以下に列挙する。

（一）黄檗寺院に暫時掛錫し諸種の役職に就任した洞門僧（転宗した僧侶は別記し除外）。

案山吉道（一六〇八～七七）豊前広寿寺即非に往謁、留まりて「蔵司」を掌職。後に木庵にも参謁。『聯灯録』巻一二「案山吉道禅師」・『続日本高僧伝』巻六「武州深川沙門吉道伝」。

桃水雲渓（＊～一六八三）黄檗山隠元に参見、七、八年間寓在（この間、何らかの役職就任か？）「木庵・高泉と法睦たり」、門下の二僧は黄檗宗へ転派。『桃水和尚伝賛』。

雲山愚白（一六一九～一七〇二）若年時、臨済宗の祖師たちに参訪中、長崎に赴き道者に参謁、その後、暫時随侍、独庵や慧極、盤珪等と同参であった。次に隠元に参学後、月舟に帰投し嗣法、寛文四年（一六六四）肥後大慈寺に昇住。即非の道風を聞き参訪、「曹洞五家風」を贈られている。止住一〇年、退院後、延宝四年（一六七六）、慧極や鉄眼と旧交を温め、木庵を黄檗山に参訪し、「偈」を交わす。また高泉に「達磨像」を贈られている。木庵とは、その後数回にわたり道交を重ねている。面山撰『泉南普陀開山雲山白和尚塔銘並序』。

普峰京順（一六二〇～九五）長崎崇福寺道者下、「版首（板頭）」に就く。『聯灯録』巻一二「普峰京順」・『続日本高僧伝六』「薩州香積寺沙門吉順伝」。

＊徳翁良高（前出）潮音の「戒会」に「引請師」を勤む〔前掲〕。

＊無得良悟（前出）木庵、隠元に参謁。独照、独湛に参謁。「礼隠元和尚于松堂」。館林の潮音に徳翁と共に安居。江戸瑞聖寺潮音下に掛錫、再度館林広済寺潮音下の「書記」に就く。『無得語録』巻四「南詢機縁」・巻六。『太寧無得悟老和尚行業記』。

＊隠之道顕（前出）貞享四年（一六八七）、江戸瑞聖寺の鉄牛に参学、「典座」に就く。後日黄檗山に掛錫「悦衆（維那）」に就く。『武州瑞光開山隠之和尚年譜』他。

＊月坡道印（前出）隠元・木庵・即非・高泉・悦山等に参謁、暫時黄檗山に滞留。『月坡禅師全録』巻二「月坡禅師行実」・『続日本高僧伝』巻七「江州比良山沙門道印伝」。月坡は黄檗僧より茨城祇園寺の関わり等、比較すれば東皐心越との因縁が非常に深い。

＊大機行休（一六六六～一七三）黄檗山千呆に単頭の任、「大機」と改号し、典座・知客を任ず。独湛・高泉・悦山・慧極、さらに法雲・月潭と参見。『大機和尚塔銘并序』。

＊天産霊苗（一六七六～一七四三）東皐に参謁、長崎興福寺・宇治黄檗山に掛錫、千呆に賞賛される。中国語を修得。黄檗山八代悦峰道章の江戸行きに随行（侍者兼通訳）。霊源、旭如、竺庵、大潮、百拙等と親交。『化城訓童行』九巻、『自心現』一巻、『輔教編翼考』五巻、『伝法正宗記翼考』五巻、他に『信心銘拈提』（享保一九年跋、泉流寺刊）、「養源天産書簡」（旧三井鶚軒蔵）、岸沢文庫所蔵「天産文集一冊」撰述。『天産和尚行業』「但馬州大聖庵開山天産老和尚行業」。

大梅法璞（一六八二～一七五七）道号「圭立」、大梅山人と称す。享保二年（一七一七）春、黄檗山に掛搭、秋に監収に就任。翌三年黄檗戒壇随喜。千呆、独湛、月船、竺庵に参学。『宝寿大梅老和尚年譜』。

黙山元轟（一六八三～一七六三）下総東昌寺隠之道顕の法嗣。正徳元年（一七一一）、慧極の住職地河内大宝山法雲寺に掛搭し、打坐は大衆の模範となり、「如意」を頂戴す。隠之の授戒会を補佐す。『武州迦葉開山黙山和尚年譜』。

上記の他、黄檗山萬福寺や各地の黄檗寺院に一時期掛錫し、役職には就かなかった洞門僧は多数いたと思われる。さらに各地の黄檗寺院に暫時留まり、黄檗僧の単数または複数に参訪し問答を交わした洞門僧も多数に上る。その一部を列挙する。なお下記の（章）第五、「偈」等を通じて黄檗僧と交流のあった僧侶は除く。

風外慧薫（一五六八～一六五四）、寂道応勲（一六二六～九九）、如実秀本（一六三四～一七一七）、覚禅慧密（一六四五～一七一二）、達道伝廓（一六五一～一七二一）、木橋澄円（一六五一～一七三一）、密山道顕（一六五二～一七三六）、月潤義光（一六五三～一七〇二）、即現徳峰（一六六一～一七四七）、円鑑雪音（一六六五～一七三〇）、智灯照玄（一六六五～一七三九）、徳州春全（一六六七～一七三五）、天巌祖暁（一六六七～一七三一）、三洲白龍（一六六九～一七六〇）、門巌芳叔（一六七二～一七三七）、廓盤高徹（一六七二～一七二九）、盈禅安臥（一六七五～一七四三）、白獣穏貞（一六七五～一七四六）、雪庭宗白（一六七七～一七五八）、黠外愚中（一六七九～一七三七）、天陰黙丕（一六八一～一七五三）、無聞寂端（一六八三～一七五七）、無倫大愚（一六八八～一七四三）、洪基了恩（一六九三～一七四七）、霊源素行（一六九九～一七六三）、是妙不伝（一七〇～五三）等。

（二）曹洞宗から黄檗宗へ転宗した僧侶、またその逆の例。

隠元下―**独本性源**（一六一八～八九）、江戸青松寺（曹洞宗）掛錫。明暦元年（一六五五）、隠元来朝後に私淑し、摂津普門寺・宇治萬福寺の知客就任。万治元年（一六五八）、江戸深川永寿山自肯庵を海福寺と改名、隠元を開山に勧請す。武州青松寺十洲補道（＊～一六四六）は独本の庶兄。

木庵下―**湛然道寂**（一六二九～七九）、薩摩福昌寺にて出家、美濃龍泰寺長霊に参学し、諸方行脚後、長霊に嗣法したが、寛文一〇年、木庵の黄檗三壇戒を受戒、延宝二年九月、木庵に嗣法。その後、長霊よりの「嗣書、大事、血脈」などを返還した。聞谷元抽撰『永福開山湛然禅師行実』。良寂道明（独本の道友、一六二二～八九）。一明道源（一六三五～八五）、梅谷道用（一六四〇～一七〇一）。廓山道昭（一六四〇～一七一七）。

独湛下―**古鏡道明**（一六二七～一七〇〇）、伊予出身、六歳で邑の曹洞宗渓聚寺是尊に投じ出家。青年期、是尊の没後、伝宗が後住候補となるが決せず、美濃妙応寺別峰瑞（世代に不在）が後住となるが、彼自身は支院安楽精舎に住す。その頃、隠元の渡来を聞き、隠元と木庵に参謁。寛文五年（一六六五）、黄檗戒壇に受戒し、更衣（転宗）、その後、帰郷し黄檗の門風を首唱し、久米郡の古址覚王寺を復興、寺観を改めた。次いで隣邑岸村の古址長隆寺も復興。延宝八年、黄檗山三代慧林入山の時、登檗し「知蔵」に就任、天和二年（一六八二）正月、黄檗山四代独湛が晋山、翌三年に登檗し「綱維」となり、次いで「堂主」となる。貞享三年（一六八三）八月、独湛に入室し伝法、六〇歳であった。温泉郡万防山得能寺、浮六郡医王山安楽寺、久米郡玉泉寺・長福寺は、いずれも疲弊した曹洞宗寺院の復興であった。『臨済正伝三四世予州龍門山覚王禅寺第一代古鏡明大和尚道行記』。化霖道龍（一六三四～一七二〇）。

潮音下―覚照元宗（一六四七～一七二〇）。琛洲と智伝（受業師は桃水雲渓）。

湛然下―鉄舟元英（一六四六～一七一九）、越後長楽寺で出家。始め木庵下、後に湛然下。

高泉下―**了翁道覚**（一六三〇～一七〇七）、出羽龍泉寺（曹洞宗）の寺僕、備前国清寺・安国寺（臨済宗）にて修行、道者・隠元・即非に参学、高泉の法嗣。荒行〔男根切断・燃指〕を修し夢中に興福寺黙子如定が現われ、薬の処方を教わり、「錦袋円」を製造販売し三千両の剰余金によって寛永寺に天海版大蔵経を寄進、不忍池傍に経堂・経蔵・公開図書館・勧学寮を建立、瑞聖寺に明版大蔵経を寄進、他天台・真言・禅宗の一九寺院には黄檗版大蔵経を寄進、寺院等の復興・建物の修復、捨て子救済、飢饉の施粥等、社会福祉に尽力した。『了翁覚禅師紀年録』『了翁禅師語録』。

師匠不明―損翁宗益の得度師、羽州禅林寺蘭州（洲）、〔蘭洲浄芳とは別人〕。

顕了霊松（一五九一～一六八六）、隠元の在世時、黄檗山に掛錫。出家時は密教僧、安居中に洞門僧・関山禅透と知遇、後日に嗣法。『月谷宗派譜』「第十一世永照寺顕了松禅師伝」。

曹源滴水（一六六一～一七一七）の伝記①『曹源和尚三会録』には、六歳で畿内の道者超元に就き髪度後、丹陽に到り、摂州仏日寺の黄檗慧林性機に就き薙髪し「単瑞」と名づけられた旨記すが、②『鷹峰聯芳系譜』中には、九歳で慧林に師事し、三年後に慧林が示寂、墨江の興禅寺月舟宗胡にまみえて師事し、その後、徳巌養存、鉄心道印に参学後、延宝年間（一六七三～八一）に月舟の指示で卍山に服膺参学、遂に嗣法したとする。彼は、黄檗宗から曹洞宗へ転宗した珍しい例である。『曹源和尚三会録』「守源先師老和尚行状」、『鷹峰聯芳系譜』中「加州大乗寺曹源滴水禅師伝」。

参考文献

吉田道興『永平寺史』第六章第三節「黄檗禅の伝来と洞門の諸師」、大本山永平寺、一九八二年。

大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編著『黄檗文化人名事典』思文閣出版、一九八八年。

吉田道興「曹洞宗と臨済宗・黄檗宗との交渉」（『道元思想のあゆみ3』曹洞宗宗学研究所編、吉川弘文館、一九九三年）。

（八）

第五、黄檗僧と「序」「跋」「偈」「尺牘」類の文書交流

『僧伝集成』の諸伝記や各語録には洞門僧と黄檗僧とが「序」「跋」「偈」「尺牘」（書簡）を通し一種の文化交流を行っていた。その一端を列挙する。＊は友誼篤厚者。傍線は注目点。

＊独庵玄光（前出）　寛文八年（一六六八）刊『鼓山為霖禅師還山録』序。貞享三年（一六八六）刊『（南山）道者禅師語録』序。「次韻独立老衲中秋月下兼謝写字」『独庵稿』巻一。「題鼓山永覚禅師画像賛」・「題鼓山為霖禅師画像賛」・「題日本刻永覚禅師所纂修鼓山志後」・「跋永覚禅師寮言続寮言」『独庵稿』巻四。貞享三年前後「喜慧極禅師見訪宿而次其韻」「訪法雲慧極禅友」『独庵稿』巻一、「寄慧極禅師五首」『独庵稿』巻二。「与慧極禅師書」『独庵稿』巻三。「附即非禅師賛」五言絶句『独庵稿』巻二。道者超元、永覚元賢の法嗣為霖道霈とその門下、許元芳・許兆亨兄弟との文通、『溲勃』巻下。林道栄〔大通詞〕との「韻」の応酬（「和韻」複数回）の親交『独庵稿』巻二・「与林道栄居士書」『独庵稿』巻三がある。黄檗関係者との道交事項は、『護法集』中『独庵稿』のほとんどに亘り所載している。

＊鉄心道印（一五九三～一六八〇）隠元、道者に参訪。隠元と別れる際、「偈」を贈られている。『続日本高僧伝』巻八「泉州蔭涼寺沙門道印伝」・『全久院志』「十一世鉄心道印禅師」。高泉に『日東洞宗初祖永平元和尚道行碑銘』撰述を依頼（延宝七年八月撰）。後に当該『碑銘』は逆流禎順から為霖道霈へ、さらに永覚元賢撰『継灯録』（元禄五年再刊本か）が編集し収録された。高泉には延宝三年撰『扶桑禅林僧宝伝』、元禄六年撰『続扶桑禅林僧宝伝』がある。

＊龍蟠松雲（一六〇六～八二）宇治興聖寺七世代の万治二年（一六五九）二月、来訪した隠元が「道元禅師画像賛」（この時の「題賛」は同寺の軸装「頂相」に付し所蔵）、「興聖寺讃詠」「朝日山観音讃仏偈」（『興聖寺文書』巻一・七五・七六・七七）。「示龍蟠禅徳」、木庵が「興聖寺値雨」「観流亭偈」（『興聖寺文書』巻一・九二）を残す。龍蟠が黄檗山に参訪した際、隠元は法鼓を鳴らし迎えた『聯灯録』巻一一。

案山吉道（前出）　慶安年間（一六四八～五二）即非に参学後、木庵に参謁、「送別の偈」を贈呈される。『聯灯録』巻一二「案山吉道禅師」・『続日本高僧伝』巻六「武州深川沙門吉道伝」。

松雲宗融（一六〇九～一六六四）道者と隠元に参謁。万治三年（一六六〇）、木庵が来訪し、七言二句の偈を贈られている。『円応寺歴住伝記』「当寺九世松雲禅師」。また木庵より「円応寺」の三大字（寺号額）を得ている。『西溟余稿』巻二「普門松雲禅師伝」。

龍睡愚穏（＊～一六八八）隠元に再訪の際、喜び迎えられ香別竈を炊き、翌日、「偈」を贈られている。象山（浄海か）と木庵が陪席。『月坡全録』巻二「金龍穏禅師伝」。

＊雲山愚白（前出）道者、隠元、木庵、慧極、鉄眼、悦山、東皐心越と道交。即非より「曹洞五家風」の大書を贈呈される。延宝四年（一六七六）、慧極や鉄眼と旧交を温め、木庵を黄檗山に参訪、「偈」を交換、高泉より「達磨像」を贈呈。『泉南普陀開山雲山白和尚塔銘並序』。「道者元禅師七周忌」、「瑞龍鉄眼和尚七周忌」、「次心越和尚見寄韻」、「喜南岳悦山禅師至」、「寄広寿即非禅師」、「中秋喜鉄眼和尚至」、「賀心越和尚住天徳開堂演法」『成合雲山愚白語録』。

普峰京順（前出）　道者が崇福寺滞在中に参謁、その後、山中に蘆を結び思索六年、道者は「偈」を贈っている。『聯灯録』巻一二「薩州香積寺普峰京順伝」。

融峰存良（一六二一～一七〇六）四一歳、隠元の開堂に「賀偈」を贈り、五一歳、再度黄檗山に登り木庵の開堂に「賀偈」を贈呈する。『幽谷余韻後編』巻三「融峰和尚伝」。

＊天瑞万琦（前出）肥前菩提寺の住持時代に、隠元の「偈」、大門の額字は柏岩性節（当時隠元の侍者、後日即非に嗣法）筆、医王殿の額字は即非筆、菩提禅寺の寺号額は木庵筆、大門の側の碑は隠元の撰述、他に菩提樹の大念数を宝鎮としている。『菩提寺世代伝』。また天瑞は、元禄六年（一六九三）、長崎興福寺在住時代の悦峰道章に「（首欠）熹宗下賜八条衣由緒」（漢文）の撰述を依頼している。『曹洞宗文化財調査目録解題集（以下、『文化財』と略称）3』一一六頁。明代皇帝熹宗（在位一六二〇～二七）、「八条衣」は変則衣？下賜のいきさつ・背景等は本文未読のため不明。

丹嶺祖衷（一六二四～一七一〇）黄檗山に上り、隠元と木庵に参謁、木庵より長偈「七言絶句」を贈られている。『重続洞上諸祖伝』巻四「法華丹嶺衷禅師伝」、『続日本高僧伝』巻七「丹波法華寺沙門祖衷伝」。

鰲（鼇）山見雪（一六二六～八五）小田原紹太寺で黄檗の宗乗挙揚をしていた鉄牛道機に「偈」を賦している。『鰲山禅師行実記』「当山開祖鰲山見雪禅師」。

＊卍山道白（前出）隠元、木庵、独照、独湛、月湛道澄（独照の法嗣）との道交を示す「輓黄檗隠元禅師」、「輓黄檗木庵和尚」、「輓嵯峨独照禅師」、「輓黄檗独湛禅師」、「輓月湛道澄禅師」が『卍山広録』巻一七に所載する。天和元年（一六八一）、木庵に「興聖開山道元和尚語録序」（延宝元年本）を依頼。「呈黄檗木庵和尚」七絶『広録』巻四四。

月坡道印（前出）加賀献珠寺の住持当初、黄檗の悦山道宗に寄せる「書」を贈っている。「寄黄檗悦山西堂書」『月坡全録』巻三（『続曹全語録一』）。

＊無得良悟（前出）享保四年（一七一九）、慧極道明に自撰の『語録』「序」を依頼、『無得語録』巻一。木庵、潮音、独照、独湛との道交あり。「師再参潮音和尚菟于小松充書記上堂」、「黒滝潮音和尚訃至拈香」『無得語録』巻二。

＊徳翁良高（前出）元禄八年（一六九五）、「黒滝潮音和尚訃至掛真拈香」『徳翁語録』巻上。

槐国万貞（一六五二～一七二七）月舟・独庵・東皐に参学。卍山の法嗣。高泉との道交を示す。「謁高泉禅師黄檗山」（七言絶句）『槐国和尚大林語録』巻下。

直指玄端（一六八九～一七七六）周州山口荘永福寺東堂雲堂岳を通し、天桂撰『正法眼蔵弁註並調絃』の付録として、甘露寺大潮元皓に「退蔵峰天桂禅師石墳碑文」（宝暦一〇年（一七六〇）を撰述依頼。彼はこれとは別に『退蔵始祖天桂禅師年譜』を編述。

鉄山心養（一五九一～一六七〇）『即非禅師全録』巻一〇には、「某山心上人」の請で即非が「永平道元禅師賛」を撰述とある。その「心上人」とは讃岐見性寺第一三世中興鉄山に相当する。香川見性寺蔵、『文化財4』三九三頁。同寺に即非筆「山

号額」も所蔵。

＊徳巌養存（＊～一七〇四）讃岐見性寺一四世・常陸大雄院二一世。木庵と書翰・「和韻」七言律詩の交換。香川見性寺蔵、（『文化財4』「文書・墨蹟」三九二頁・三九四頁）。徳巌は『永平衆寮箴規然犀』『仏素袈裟考』『梵網経古迹記折衷』『楞伽経折衷』『観音経折衷』を撰述。

明堂正智（前出）寛文五年（一六六五）頃か、木庵に受戒後、問答商量し「偈」を贈られている。『続日域洞上諸祖伝』巻四「長昌寺明堂智禅師伝」。

＊面山瑞方（前出）元禄一六年（一七〇四）に千呆性侫の法孫北溟寂源、宝永二年（一七〇五）仲春に白石護福寺青巌明光、享保六年（一七二一）冬結制に鉄牛の法嗣鉄関元参が来山、「賀偈」を呈す。享保一年（一七二五）に南京寺萬宗と唱和、福済寺大鵬に中国の風物を訊問している。『面山和尚広録年譜』。百痴元拙との道交は、「謝前四天百痴禅師来訪」同右巻一五に所載する。さらに鉄関元参との道交は、「和威徳山鉄関和尚年旦兼寓留別之意」『面山逸録』（以下『逸録』と略称）巻六、「付如意於象林長老（鉄関）偈并引」『逸録』巻七、「和臨済鉄関禅師年旦」『逸録』巻八、「和鉄関和尚之孟春見寄」・「和肥後鉄関和尚之来韻」・「和来韻酬肥後大悲院鉄関禅師」『逸録』巻九がある。以上、青壮年期の面山は黄檗僧との道交は極めて親密であったといえる。しかし、老年期の面山は前述のごとく月舟や卍山の容檗派に対し、批判的対決姿勢（『椙樹林清規』批判・『僧堂清規考訂別録』）になっている。それは、洞門の独自性や主体性を確立するためであったと推測できる。なお既に元禄八年一〇月に遷化していた高泉性激を慕い、面山が年代不明ながら老境に至ったある年の三月、伏見栄春寺（曹洞宗）において竹林の奥にある梅花の芳香に魅かれ、高泉の詩偈（所在未詳）と和韻「到伏見栄春寺和高泉禅師韻」（『面山広録』巻一一）を残しているのは、彼の学識と文才豊かな面を評価していたからであろう。

＊頑極官慶（一六八三～一七六七）正徳三年（一七一三）、黄檗山に掛錫、千呆に参学。享保一一年（一七二六）、高泉と商量がある。『頑極官慶語録』（安永九年刊）の「序文」は黄檗僧大潮元皓の撰述（明和二年）。延享二年（一七四五）、大鵬正鯤の黄檗山晋住（一五代）した際、「賀大鵬禅師住檗山」の「偈」（『語録』巻下）、同じく宝暦四年（一七五四）九月、祖眼元明が晋住（一七代）した時にも「賀祖眼禅師住檗山」の「偈」を贈呈（同右）している。『新豊頑極和尚年譜』。

＊無隠道費（前出）著書『無孔笛』（延享元年刊）に大潮元皓、百拙元養、大鵬正鯤の「序」、「報謝海雲百拙和尚賜無孔笛弁言二首」（『無孔笛』、『無隠禅師語録』（宝暦四年刊）に大鵬と大潮の「序文」、『心学典論』（寛延四年刊）に大潮の「序文」を得る。百拙・大鵬・大潮との尺牘（書状綴＝百拙二通、大鵬一通、大潮八通）、長門大寧寺に所蔵。（『文化財4』。慧極使用の「鉄如意」の「銘」を江無尽居士家より依頼され製作『語録』巻六（『曹全書語録三』所収）。

風外〔黙室〕焉智（＊～一七一二）木庵に参謁、「垂語〔黒豆未生芽時如何〕」を与えられる。独庵を友とし、道者、鉄心道印、心越等に参学。『洞上雲月録』「風外禅師伝」。

天瑞万琦（＊～一七〇六）肥前菩提寺七代住職。隠元・木庵・即非と道交あり。即非に「大門」側の「碑」の撰述を依頼。『菩提寺世代伝』「七代天瑞琦和尚」。

雪山石瑞（＊～一七二四）長野興隆寺八世、享保六年（一七二一）中秋、佐久の温泉に入湯療養中の黄檗山万福寺七世悦峰道章（独湛の法嗣）が当寺を訪問一泊し、雪山と相会し謝辞の詞を残した。『文化財7』七八頁に掲載。

林穀瑞鳳（＊～一七三五）長野岩松院一四世。黄檗山万福寺八世悦峰道章が享保六年（一七二一）中秋、感謝の詞を書した書、また悦峰が享保七年仲春に最明寺主実山の永平寺拝登を祝し詠んだ「七言絶句」が残る。『文化財7』一四八頁。

黙子素淵（一六七三～一七四六）徳翁の法嗣。元禄八年（一六九五）高泉と鉄眼に参謁、同一六年に慧極に参見して問答を交わす。『黙子和尚年譜』。

華厳曹海（一六八五～一七六一）大用慧照の法嗣。越前永建寺・丹波西光庵、山城神応寺、近江長福寺歴住。徳翁・卍山、丹嶺・惟慧・慧極・無得等に参学。伝記「長福華厳曹海禅師塔銘並序」。慧極との道交を示すと想定される資料、『長福曹海語録』には不記。

＊慈麟玄趾（一六九〇～一七六四）卍山・面山・隠之・呉雲法曇等に参学。密山道顕の法嗣。「五百応真開光、次高泉和尚賛語韻」『慈麟玄趾語録』巻六。高泉との

道交は伝記には記されていない。なお本師密山の住職地河内天童山大黒寺『語録』として遺著『天童剰語』を編纂し、伝記「行業曲記」を編集上梓し、寿昌派呉雲の法嗣「天聖蘭山道昶」の「偈」を巻尾に付題した（「師翁麟和尚行業記」）とある。その『天童剰語』は『禅籍目録』には書名だけを記すが、『国書総目録』巻五には、「元文五年刊、（版）岸沢惟安」とあり、静岡旭伝院岸沢文庫に所蔵する。

石堂維那（生没年不詳）延宝九年（一六八一）九月、石堂の依頼で黄檗山七世悦山道宗が無著妙融（真空禅師）の伝記『勅諡真空禅師行道記』（末尾に「跋文」）を撰述した。無著の伝記として最も信憑性に富む（『曹全書解題』竹内道雄）と評される。

鉄文道樹（一七一〇～八一）黙子素淵の法嗣。享保一五年（一七三〇）頃、平戸松浦の瑞光寺黙堂道轟〈慧林性機の法嗣〉に参学淹留、「偈・頌」の応酬あり。本師黙子と共著の『参同契着語並註』『趙州和尚十二時歌着語』、単著『百則評頌』。『泉松開山鉄文樹和尚事実』。

☆反黄檗派

大用龍存（一五八〇～一六六五）道者超元が渡来した当初に参学相契、後に道者に「狗迎吠拈杖相闘図」の「題賛」を需め贈られている。一方で黄檗山の山門扁牓「推倒洞門」に対し三門前に柴を積み「火定」に入て真偽を決せんと強く抗議し扁牓を卸させた逸話を残す。興聖寺龍蟠と道交、「追悼偈」あり。『十王堂記』『明大寺観音堂縁義起』の撰述あり。三州岡崎頭陀寺開山、奥州泰心院住職（脱牌？）。『聯灯録』巻一二「大用禅師伝」・『続日本高僧伝』巻六「沙門大用伝」。

損翁宗益（一六四九～一七〇五）奥州泰心院八世、面山の本師。隠元と永覚元賢に対しては「晩明英傑」と評価し、門下では木庵を超える者はいないとするが、潮音道海撰『坐禅論』（延宝七年刊）に対し「二乗の観練にも及ばない」と批評、また独庵玄光の学解は「永覚の識量に及ばない」、さらに生涯終に南面し大衆を法堂に説法せず但聡明をもって冊子上に仏祖の跡蹤を模索するだけ、と批判している（『見聞宝永記』）。法嗣の面山も前述のとおり、『黄檗清規』の洞門への侵害に対し、特に対決姿勢を貫き批判的であった。

江戸前期の佐賀出身の医者（儒医）、神道崇拝者の向井元升（拾棄奴、一六〇九～七七）撰『知耻篇』三巻（新村出監修『海表叢書』第一巻所収、京都大学図書館所蔵）には、異国の風儀に変改するさまや隠元や道者の布教に関する言動に狂奔する僧俗の様は、日本僧の恥辱では等と指摘している。

また臨済宗側からの黄檗批判書として、桂林崇琛（花園末葉亡名子、一六五三～一七二八）撰『禅林執弊集』正続二巻（元禄一三年記、漢文駒澤大学図書館蔵）は、正編二二項目・続編一五項目は、臨済宗や曹洞宗に関説（龍渓性潜、雲山愚白、独庵玄光等）することも多少あるが、ほとんど黄檗批判の内容である。無著道忠（一六五三～一七四四）撰『黄檗外記』（無著の撰述目録中「禅学類」に属す。妙心寺塔頭龍華院本）は、隠元を中心とする黄檗禅の渡来した諸事情を妙心寺龍渓や龍華院竺印祖門（無著の本師）をはじめ京所司坂倉周防守重宗、酒井讃岐守忠直等の尽力によることを述べつつ、無著の視点から竺印と共に隠元は礼法を識らず、和語も人により使い分けをしていることなど黄檗僧の種々の逸話を紹介し、黄檗宗に対し批判している。参照〔木村得玄編『黄檗資料集成』第二巻、春秋社、二〇一五年〕

□『文化財一～七』（以下『文化財』と略称）所収黄檗僧関連文献・資料。

①黄檗希運撰『断際禅師伝心法要』抜書き（『見聞雑録』所収）、大阪東北院蔵、『文化財5』一七三頁。

②蘭山道昶撰・道蒙編『和三籟集』、『文化財5』一三三頁。隠元編『三籟集』に和したもの。宝永四年（一七〇七）刊。京都盛林寺蔵。『文化財5』一三三頁。『霞浦集冬日雑題一百七首』一巻一冊、鳥取定光寺蔵、『文化財4』二三九頁。蘭山は東皐の法嗣呉雲の弟子、天徳寺三世。

③潮音道海撰『（黒瀧潮音禅師）三祖信心銘要解』門人三人編、埼玉西光寺蔵。「偈頌鈔並要解」中の一点。『文化財6』二四一頁。参考『禅籍目録』「信心銘要解」二一九頁。

④折居光輪述、伊藤祐仙筆『永平広録木庵序傍註』、寛文一二年、卍山編『永平広録』に木庵が延宝九年（一六八一）に「序」を記載した註記。山口洞海寺蔵、『文化財4』一五〇頁。

（一一）

⑤木庵筆「書状」一通、香川見性寺徳巌養存宛て「礼状」、『文化財4』三九二頁。
⑥慧極撰『（山口）広厳寺由緒』、三世義空良信より依頼、元禄八年。『文化財4』一八一頁。
⑦高泉撰「（海西）筑山宗久〈居士〉宝塔賛」元禄元年筆、一巻。『文化財4』一三〇頁。宗久居士は禅昌寺の外護者か。独住四世来源祖西（一六九二没）代か。来源と高泉との道交ありか。同高泉賛「西天二十八祖図」二三幅対、『文化財5』一六五～六頁。五世一丈玄長との道交。
⑧撰者不詳（解説：独湛と親交ある黄檗僧）「書簡（翰）集」（写本）一四〇通、貞祥寺一二世大鏡宗円（一六八〇没）代か。木庵等との道交。長野貞祥寺蔵。『文化財7』一六七～八頁。
⑨蘭渓道隆撰『注心経』（『是正隆蘭渓禅師注心経』か）。寛保三年序跋刊、蘭渓注の後に永覚元賢の指掌、為輪霖道霈の請益説を掲ぐ。『禅籍目録』所収本との同異は不明）。岩本耕雲が明治二二年、能登總持寺安居中に書写したものを鳥取大岳院に所蔵。『文化財4』二四八頁。
⑩〔宝暦三年〕如水書写『黄檗山内清規』七章、（末尾「元禄十三年一一月、黄檗山知客寮置」）。『文化財5』三九二～三頁。

第六、黄檗禅の正面向き「頂相」の伝来と洞門への流行

「頂相」は、祖相（祖師の肖像）が本より「無相」（全ての執着を離れた姿）であり、如来の頂相を見ようとしても見ることができないようなもの（『禅林象器箋』霊像門）を指す、という。本来、弟子が描き、師匠が「偈」（法語）を添えて渡していた。「衣鉢」や「嗣書」と同様に嗣法の標準（証拠・型）として扱われていたのである。師匠の「真儀」「真様」（真実の肖像）・「写真」・「伝神写照」を指し、できるだけ実像に近い肖像が求められる。その結果、いつの頃からか次第に専門絵師が現れ描くようになってきたと思われる。師匠が遷化の際、入龕の後、その「頂相」を法堂の上間に移し、移龕・鎖龕仏事に次いで「掛真」仏事を修していた（『勅修百丈清規「移龕」）。近頃、中日の一般寺院では、ほとんど行われていない模様である。

隠元の渡来以前、元代において、たとえば中峰明本（一二六二～一三二三）の複数ある請来の頂相中、「中峰明本樹下坐禅像」（広演賛、京都慈照院像）は、他の総髪姿と相違し、剃髪し法衣に袈裟を着け松樹下に坐し、正面向きで実在感がある。室町期の宗峰妙超（一二八二～一三三七）の「宗峰妙超自賛頂相」（京都大徳寺蔵）と一休宗純（一三九四～一四八一）の「一休宗純像自賛」（京都酬恩庵蔵）は、両方とも横向きで、視線は正面向きであるが、やはり実在感があり、正面向きになる過渡期の作品といえる。

遣明使を勤めた臨済宗夢窓派策彦周良（一五〇一～七九）の「策彦周良像」（柯雨窓賛、京都妙智院蔵）は、榻に腰掛け東坡巾を被り左手に本を持ち正面向き、同じく彼の「策彦周良像」（徳雲山人賛、同妙智院蔵）は、正面向きで袈裟を纏い曲彔に坐す。両方とも嘉靖一九年（一五四〇）、寧波在住の画家「芦」（行実不詳）に依頼して描かせた可能性がある。

隠元渡来の承応三年（一六五四）から享保年間（一七一六～三六）までのおよそ七〇年間に描かれた「黄檗肖像画」の代表的画家には、中国人楊道真、楊に師事した日本人喜多道矩（一六六三没）・喜多元規（生没年不詳）父子がいる。その他、渡来以前から長崎興福寺に在住していた逸然性融（一六〇一～六八）、渡来を通し日本へ請来された祖師図や羅漢図の画家である張琦〔「費隠像」宇治萬福寺蔵〕、陳賢〔「列祖図冊（逸然模本）」萬福寺蔵〕、范爵〔「十八羅漢図巻」福岡千眼寺蔵〕などが知られる。特に張琦の師曽鯨（一五六八～一六五〇）は、面貌に西洋画の陰影法による影響を受け暈取りを丹念に施し「中西折衷技術」と称される。それを張琦が学び、楊道真に継承し、現今の黄檗肖像画に反映している、と評される。

日本曹洞宗における祖師の「頂相」に関する断片的な叙述はともかく、網羅的かつ本格的研究は寡聞にして知らない。道元禅師の主要な「頂相」について大久保道舟氏は、時代順に①建長元年、道元五一歳の「自賛」を付す頂相は、室町末期の成立、義雲筆系賛は正慶二年（一三三三）頃、大野市宝慶寺蔵（「月見の画像」半身像）、②成立は南北朝か室町初期か、熊本市（日蓮宗）本妙寺蔵、③命天慶受添賛の文明

一九年（一四八七）八月、浜松市普済寺蔵、④室町末期か・慶長七年（一六〇二）福井県志比永平寺蔵（元「袈裟有環」）、⑤黄檗隠元賛の万治二年（一六五九）仲春、京都府興聖寺蔵を挙げている。

二祖懐奘禅師の自賛「頂相」は愛知県豊川市（旧宝飯郡一宮）松源院蔵（残念ながら赤外線写真でも不鮮明）、寒巌義尹禅師の永仁二年（一二九九）自賛「頂相」（頭部残存、体部焼失、賛一部剥落）は熊本市大慈寺蔵（熊本県立美術館寄託）、三祖徹通義介禅師の自画自賛「頂相」（原本逸亡）は明峰素哲の法孫菊堂祖英が永享六年（一四三四）八月に模写した金沢大乗寺蔵、瑩山紹瑾禅師の自賛「頂相」は、二本あり、一に石川県東嶺寺蔵（『瑩山禅師研究』口絵写真「半身像」に警策）、二に正中二年（一三二五）自画自賛「頂相」（伊藤道海撰『常済大師伝記』口絵写真「曲泉」に払子）神奈川県總持寺蔵がある。

永平寺には、曇希没後の「寂円派」（正平五年から弘治元年頃まで）中の諸祖「七世以一」、「八世喜純」、「九世宋吾」、〔「十世永智」、「十一世祖機」は欠損〕「十二世了鑑」、「十三世建綱」、「伝十四世建撕」、長享元年（一四八七）自賛「十五世光周」、文亀一六年（一五一九）一一月自賛「十六世宗縁」、天文一二年（一五四三）九月自賛「十七世以貫」の各頂相を所蔵する。

以上の諸祖「頂相」は、いずれも横向きで個性的であるが、中でも実像に近く傑出していると思われるものとして、道元禅師の頂相は宝慶寺蔵（「月見の画像」）、寒巌義尹禅師の頂相は大慈寺蔵、瑩山禅師の頂相は總持寺蔵、これらは概ね個性的容貌で優れている。永平寺蔵の寂円派世代の「頂相」、すなわち「以一」、「喜純」、「伝建撕」、「光周」、「宗縁」、「以貫」などは、横向きながら実在感があるものの「黄檗禅」の頂相に比較すれば多少もの足りない。

参考文献

「臨済禅師一一五〇年・白隠禅師二五〇遠諱記念　禅―心をかたちに」京博・東博編集目録、二〇一六年。
錦織亮介『黄檗禅林の絵画』中央公論美術出版、二〇〇六年。
大久保道舟『修訂増補　道元禅師伝の研究』第十二章「遺著及び遺影について」第四節『画像の種目とその伝承』一九六六年。
笛岡自照『永平寺雑稿』古径荘、一九七三年。
竹内尚次「禅林美術史稿―曹洞宗教団について」東京国立博物館美術誌二六四、一九七三年。
『永平寺史』上巻第三章第七節、一九八二年。
『永平寺史料全書　文書編』第一巻第一章　二四条、第二章五三・五六・五八・六四・六八・七〇・七一条、第三章八三・九三条。大本山永平寺、二〇一二年。

以下、主に『文化財』の蒐集した寺院中の口絵や解説より抽出した洞門祖師の正面向き「頂相」を中心に列挙したが、宗門内寺院の資料調査が現在のところ網羅的に充分に行われず、従って掲載されず埋もれたものが多数あることをあらかじめ、お断りしておきたい。

まず法衣・形態まで明代黄檗肖像画中、「隠元騎獅像」を模倣した特例として、「①無隠費禅師自賛画像」（『曹全書語録三』口絵写真、島根瑞巌寺旧蔵〈図1〉）を採り上げる。この頂相は「**隠元騎獅像**」（長崎崇福寺・興福寺、愛知東輪寺蔵〈図2〉）に酷似している。黄檗風正面向きの頂相も島根円光寺に所蔵する。彼は身も心も黄檗宗に心酔しているように窺える。黄檗宗東輪寺蔵「隠元騎獅像」は、宝永六年（一七〇九）六月以前の一時期、尾張藩士桜井内記が将来し、曹洞宗愛知万松寺（一四代逸堂察応）に所蔵され、その後東輪寺天麟和尚に委譲したいきさつが、軸裏中央に記されている。なお長門大寧寺蔵「②無隠道費頂相」（三六世大麟道址賛）は横向きになっている（『増補改訂曹洞宗瑞雲山大寧護国禅寺略史』一四八頁、二〇一〇年。宗報表紙 平成二五年九月）。

◎正面向きの「頂相」〔黄檗肖像画に影響を受けた洞門僧の「頂相」。一部例外〕。

編集上、各祖師の肖像画「〇〇画像」の称を廃し、統一的に「頂相」としたことをご寛恕願いたい。

文頭の印◇は同寺院の世代に複数点あること、☆は同一人の頂相に番号を付けその所蔵寺院を示し、★は道元禅師の特例、末尾＊以下は黄檗僧と寿昌派僧の頂相を

所蔵する寺院を示した。

「通幻寂霊自賛頂相」（一三九一没）兵庫永澤寺蔵、『文化財5』。宗報表紙平成二七―一。

☆「①開山源翁心昭頂相」（一四〇〇没、無落款無賛、絹本、彩色、年代不詳。）新潟雲泉寺蔵、『文化財7』。

「②開山源翁玄妙頂相」（彩色、一幅。横向き）茨城安穏寺蔵、『文化財6』。

「無著妙融頂相（一三九三没、萬福寺七世悦山道宗賛）」、延宝九年（一六八一）印記、大分英雄寺蔵、『文化財3』。三世琢堂徹清代。

◇「開山悦叟祖閲頂相」（雲洞庵三四世祥水海雲賛）新潟福勝寺蔵『文化財7』、宗報表紙平成二八―六。賛の撰者祥水（一八二七没）は黄檗僧との道交等行実不詳。頂相の作者も不明。頂相と賛は別布。以下の八幅も同じ体裁（つまり前向きの頂相と推定）。「四世鑑質閲察頂相」「五世鳳質伊察頂相」「八世教室恵訓頂相」「一一世橘叟梵清頂相」〔二幅〕、「一二世三岑梵州頂相」「一三世風屋良薫頂相」「二二世宗嶽得髄頂相、新潟福勝寺蔵。

◇「亀翁良鶴頂相」（一丈玄長題賛）長崎晧台寺蔵、『文化財3』。宗報表紙平成二四―三。「①四世蒙山玄光頂相」元録二年自賛（逆流請）晧台寺蔵、『曹全書語録一』口絵・『文化財3』。「湛元自澄頂相」晧台寺蔵、『文化財3』、宗報表紙平成二四―四。

「②独庵玄光頂相」元禄五年自賛（万源請）元大阪大道寺蔵・現駒大禅博蔵〈本書口絵1〉。

☆「①月舟宗胡頂相」（徳翁良高賛）岡山円通寺蔵、『文化財4』。

「②月舟宗胡頂相（円相内）」（智燈照玄賛）、駒大禅博蔵。他京都禅定寺・大阪禅徳寺・金沢大乗寺蔵あり。

「（三代）蔵山良機頂相」素雪讃、円相内、岡山円通寺蔵、宗報表紙平成二五―七。

「香山鉄梅頂相」（玄楼奥龍賛）、岡山洞松寺蔵、〔卓爾画〕『文化財4』。

◇「①雲山愚白自賛頂相」「央山玄中頂相」「霊源活湛頂相」富山瑞龍寺蔵、『文化財7』。

「②雲山愚白頂相」『続曹全語録一』口絵一九二頁。半身像（拄杖と払子を持つ隠元頂相に相似）。

「月澗義光頂相」卍山法嗣、卍山賛、富山光禅寺蔵、『文化財7』、宗報表紙平成二三―五。

「梅峰竺信頂相」興聖寺八世・奈良興禅寺開山、兵庫安養寺蔵、『興聖寺文書』巻二、『文化財5』。

◇「丹嶺祖衷自賛頂相」「璉山萬瑚自賛頂相」「玉洲海琳自賛頂相」「良国雷賢頂相（玄楼賛）」「①黙子祖淵自賛頂相」「頑極官慶自賛頂相」表紙平成二二―八、「太沖喝玄頂相（岱宗賛）」宗報表紙平成二七―一一。「齢峰雷寿頂相（玄楼賛）」「敦光泰恭自賛頂相」「孝存梅友自賛頂相」「痴極大謙自賛頂相」「宝園霊樹自賛頂相」「大屋密定頂相（清凜賛）」「佛山恵学頂相（巨海賛）」「鳳山道春自賛頂相」「大成晩器頂相（覚巖賛）」「徳峯尚淳頂相（無款）」三重東雲寺蔵。同寺に版画の正面向き「道元禅師頂相」あり。

「②黙子祖淵自題頂相」『曹全書語録四』口絵一三〇頁。半身像（両手に如意を持つ、環付袈裟）

「黙堂智契頂相」三重広禅寺、宗報表紙平成二八―七。

☆「①徳翁良高頂相」広島千手寺蔵。「②開山徳翁良高自賛頂相」彩色、岡山円通寺蔵。③〔横向き、史伝下口絵「自賛画像」岸沢文庫蔵〕。

「惟慧道定自賛頂相」静岡岸沢惟安氏蔵、『曹全書史伝下』口絵。絹本・彩色。

「卍山道白自賛頂相」立花実山画、福岡東林寺蔵、『文化財3』。

◇「明州珠心頂相（玄趾賛）」「密山道顕頂相（玄趾賛）」「一入覚門頂相」「曇瑞禅苗自賛頂相」「佛海天龍頂相（愚禅賛）」「覚海真禅自賛頂相」金沢大乗寺蔵、「加賀大乗寺展」一九七二年・「加賀の古刹　大乗寺の名宝」一九八七年。

☆「①天桂伝尊頂相」大阪陽松庵〔円中、半身〕・「②天桂伝尊自賛頂相」群馬孝顕寺蔵『文化財5』〔口絵〕、③山口故弘津説三氏蔵、『曹全書注解四』口絵、「④天桂伝尊頂相」（陽松庵龍水如徳賛）、⑤長野栽松院蔵『続曹全歌頌』口絵、⑥『続曹全語録二』「驢耳弾琴」口絵三頁。

（一四）

◇「①無得良悟大和尚頂相」（横向き）」山口長門大寧寺蔵、『大寧護国禅寺略史』、「②無得良悟自賛頂相（前向き）」同右、宗報表紙平成二三―六、「③無得良悟自賛頂相〔前向き〕」島根円光寺蔵、『曹全書語録三』口絵。

「泰洲通量頂相」島根龍雲寺蔵、『文化財4』、宗報表紙平成二八―八。

「嶺南賢孝頂相」愛知龍潭寺蔵、文化四年（一八〇七）、宗報表紙平成二八―一〇。

「智外鉄忍自賛頂相」愛知妙昌寺蔵、壬寅中秋、宗報表紙平成二四―九。

「（開山）湘水活潭頂相」岐阜広福寺蔵、『文化財1』。

「透空快鱗頂相」岐阜長徳院蔵、石川力山編『龍泰寺史』一一二頁。

「圭立法璞自賛頂相〔円中、半身〕」大梅山人、長野貞祥寺蔵『文化財7』。

「隠之道顕頂相」（蘭山道昶賛）『曹全書史伝下』四四一頁。〔蘭山は寿昌派僧〕

「（開山）雲門即道頂相」奈良世尊寺蔵、『文化財5』二三二頁。宗報表紙平成二四―六。

「松間宗永頂相」、卍山賛、結跏座像、大阪府伊勢寺蔵、『文化財5』宗報表紙平成二六―七。

「龍水如得自賛頂相」円相内、大阪府陽松庵蔵、『文化財5』、宗報表紙平成二四―八。

「面山瑞方頂相」彩色、大分英雄寺蔵、『文化財3』。

「（九世）梅聞祖芳頂相」大分長松寺、『文化財3』、宗報表紙平成二四―七。

「（独住十二世）鉄叟田牛頂相」兵庫永澤寺蔵、『文化財5』。

「実山朴仙頂相」（霊谷泰仙賛）、新潟観音寺蔵、『文化財7』。

「千丈実巌自賛頂相」長野長国寺蔵、『曹全書語録五』口絵。

「逆水洞流自賛頂相」矢田広貫画、長野西福寺蔵、『文化財7』、宗報表紙平成二二―七。

「玄楼奥龍自賛頂相〔左右に二人の侍僧〕」静岡旭伝院岸沢文庫蔵、『続宗補』口絵。

「雪鳳金翎頂相」華厳曹海法嗣、北海道高龍寺蔵、『文化財2』、宗報表紙平成二三―八。

「日山海東自賛頂相」、華厳法嗣、宗報表紙平成二九―一・駒大禅博蔵。

「恒山画龍自賛頂相」兵庫景福寺蔵、『曹全書室中法語』口絵。

「雲居無庵自賛頂相」島根清光院蔵、『文化財4』。

「雷庵義黙頂相」奈良興禅寺蔵（永平寺五七世載庵禹隣賛）天保五年（一八三四）、『文化財5』。

「独明良因頂相」自題、徳翁法嗣。富山光台寺蔵、『禅文化洞上墨蹟』一〇、三二〇頁。

「惟一成允自賛頂相」天桂法孫、羅山現成法嗣、円相中、群馬孝顕寺蔵、同右、四一三頁。

「梅園祖欽頂相」群馬補陀寺所蔵、絶海祖船賛、『文化財6』、宗報表紙平成二七―一二。

「観禅眺宗頂相」永平寺五九世、巨海東流賛、千葉勝胤寺蔵、『文化財6』、宗報表紙平成二五―一一。

★「道元禅師頂相（玄説画。即非賛）」香川見性寺蔵、円相内〔横内向き〕、『文化財4』三九三頁。

「道者超元自賛頂相」大分県臼杵市多幅寺蔵。

☆＊「①覚浪道盛自賛頂相」茨城祇園蔵、紙本彩色。「②同上」〔覚浪は東皐の法祖。「心越禅師像」とあるが画面から「覚浪禅師像」であろう〕東博。＊「①開山心越興儔自画賛頂相」・「②同上（蘭山道昶賛）」、二幅、祇園寺蔵。『文化財6』。「③東皐心越自画賛頂相」円相内彩色、祇園寺蔵・「④同上」円相内淡墨、達磨寺蔵。＊「二世呉雲法曇頂相（蘭山道昶賛）」円相内、祇園寺蔵、同上。宗報表紙平成二四―五。＊「三世蘭山道昶自賛頂相」二幅（四言絶句・四言律詩）、円相内、同上。表紙平成二五―六

＊「密雲円悟頂相（隠元賛）」喜多元規画、密雲は隠元の法祖父、駒大禅博蔵〈本書口絵2〉。

＊「永覚元賢頂相」喜多元規画（写本）、一幅、加賀大乗寺蔵、『大乗寺の名宝』

一九八七年。

＊「〔黄檗〕鉄牛道機自賛頂相」栃木大雄寺蔵、貞享二年（一六八五）。『文化財6』。

＊「黄檗即非自賛頂相」福岡東林寺蔵、『文化財3』、即非〔北九州市福聚寺開山〕。「②黄檗即非頂相」喜多元規画・天和三年（一六八三）千呆性佼賛、駒大禅博蔵〈図3〉。その他、「③即非自賛頂相」喜多元規画、北九州市福聚寺蔵と「④即非自賛頂相」喜多道矩画、神戸市立博物館蔵がある。

上記、「通幻頂相」の制作年代は不明であるが水彩画風であるので比較的新しい成立（近代か）と推定できる。「源翁頂相」に関連し、鳥取退休寺蔵の木像は、眼光鋭く全身にみなぎる迫力や存在感に圧倒される。ところで当該頂相の解説に「古画」（『宗報』解説）とあり、画師と制作年代も不明である。穏やかな顔つきで曲泉に座し、右手に拄杖、左手に払子を持っている姿は、どこかよく知られる「隠元像」（萬福寺蔵）に似ている。

「無著頂相」には、木庵の法嗣・萬福寺七世悦山道宗（一六二九～一七〇九）の「賛」（延宝九年八月）がある。悦山は能筆家として有名である。恐らく英雄寺三世琢堂徹清（一七〇七年没）との道交があり、琢堂が無著の行歴を添えて依頼したものと推定できる。

新潟福勝寺蔵「（開山）悦叟頂相」以下、八名の歴住者の「賛」の撰者は、いずれも新潟普賢寺一九世、同総雲寺一六世、總持寺普蔵院輪住を歴住した祥水海雲（生没年不詳）である。その「賛」の出来栄えから相当学殖に恵まれた人物と思われる。一方、個性的な「頂相」を描いた複数の「絵師」の名前と成立時期、それを継承してきた次第は、すべて不明である。

長崎晧台寺蔵の開山「亀翁頂相」以下、二三世「聯山頂相」まで（八世を除く）晧台寺世代の「頂相」は、「黄檗肖像画」の専門絵師（崇福寺や興福寺の祖師像を手がけた人物）に依頼し、描かせたのではなかろうか。開山「亀翁頂相」と「独庵頂相」の二枚を筆者が見る限り、その完成度は高い。なお「独庵頂相」の晧台寺蔵と元大道寺蔵（現駒大禅博蔵・本書口絵1）の二枚を比較すると、面貌の描き方などは晧台寺蔵のほうが数段優れている。また『護法集』「独庵稿四」には、「自賛」が他に二点を収録（『曹全書語録一』七六一頁）している。従って「独庵頂相」は、現在は不明ながら、他に二点あった可能性を指摘しておきたい。

「月舟頂相」（徳翁賛）は、元禄一四年春、法嗣徳翁の賛が付き、曲泉に座し、拄杖は左側に立てかけ、右手に払子を持っている。「月舟頂相」（智灯賛）は、年月日なしで参学者智灯の賛、円相の中、半身像で穏やかな表情を浮かべ、右手に払子を持っている。嗣法者と同様に参学者でも尊崇する師匠の頂相を常に傍近くに保持し、礼拝していた一例である。

「雲山頂相」以下三点の頂相を所蔵する国宝富山瑞龍寺には、隠元の墨蹟をはじめ黄檗僧との関わりが多く、他にも正面向きの世代住職の頂相を保存している可能性が大きい。

「丹嶺頂相」以下一七点の頂相を所蔵する三重県東雲寺は、先代から現住まで長年蒐集してきた宗門祖師の貴重な墨蹟多数を保存していることで識者間では有名である。『永平寺史』上巻の冒頭口絵写真「永平寺全山図」の数枚は東雲寺蔵である。

「天桂頂相」は五点と比較的多く残っている。絵師は異なるが、青壮年から老人に至る容貌が辿れ、興味深い。有名なオランダの画家ルーベンスは変貌する自画像を数枚残している。

「徳翁頂相」は、①の広島千手寺蔵と②の岡山円通寺蔵が正面向きであるが、③の岸沢文庫蔵は横向きが確認できた。「無得頂相」も横向きと前向きの両方ある。成立の経緯や背景、頂相や心情がたどれる資料があれば面白いであろう。

「道元禅師頂相」に関し高松見性寺ご住職に文書で確認したところ、ご親切にも「写真」（軸装一幅）を送付頂いた。拝見すると従来のものとは全く相違し、円相中、横向きであった。即非（一六三〇～七一）の「賛」は、不規則な語句（六言四句・七言二句・五言・四言、七言二句）の「偈」で構成され（『文化財4』三九三頁）、寛文九年（一六六九）の撰述である。その年記により当時の住職は、一三世鉄山心養（一五九一～一六七〇）と推定できる。伝記『指林零星集』巻二「鉄山和上鶴林記」には、その関連記事なし。

（一六）

末尾＊印の中、前半の四人は曹洞宗寿昌派関係の茨城祇園寺蔵の頂相、後の四人は黄檗宗関係の頂相。「覚浪頂相」は東皐の「将来品」（祇園寺「宝物一覧表」）である。「密雲頂相」の絵師は、喜多道矩の子・喜多元規である。「鉄牛頂相」を所蔵する栃木大雄寺は、彼の墨蹟「唯伝初祖印」「達磨円覚大師」「独露鉄牛機」（三幅対）も所蔵しているので頂相の年記（貞享二年）から鉄牛（一六二八～一七〇〇）と当時の大雄寺一二世幽峯玄玄（一六九〇没）と何らかの道交があった可能性を推定できる。但し『大雄寺歴住略記』には入院・退院・遷化の略記で詳細は不明。

黄檗山では、四五代英巌通璋（大正一五年寂）以降の世代は、「写真」による「頂相」になっている（『黄檗宗大本山萬福寺歴代住持特集』黄檗宗布教師会編、二〇一一年）。これと同様、近頃、大本山總持寺は独住一世栴崖奕堂から二二世得道芳髄までの各禅師の所謂「写真」に「賛」〔三世・十世・十一世・十三世・十四世・十五世・十六世の賛なし〕を添え、「頂相」として使用している（『禅文化洞上墨蹟』一〇、一九八～二八七頁、二〇一二年）。今後、宗門もこの用例を踏襲していく可能性もあるのではなかろうか。もし、そうなれば「絵師」の存在は必要がないことになる。世の趨勢とはいえ、少々味気なくなるのはさびしい限りである。

第七、宇治黄檗山萬福寺等「明様式（黄檗様）」伽藍の流行

天和元年（一六八一）、常陸岱宗山天徳寺の住持月坡道印が当該寺院を東皐心越に席を譲り金沢へ向かった。元の天徳寺は城西河和田村に移転。その後、伽藍は明様式に改築、元禄四年（一六九一）にほぼ完成。翌年一〇月、東皐の天徳寺入院開堂が盛大に厳修され、正徳二年（一七一二）、**寿昌山祇園寺**と改称、四世大寂界仙代に七堂伽藍が整備。ところが、安政五年（一八五八）二月、回禄に遭い穢跡堂を残し、他はすべて焼失。明治四一年に入院した二二世提鈿斧山（浅野）師が尽力し数年後に復興し、現在にいたる。

月坡が天和元年に入院した加賀（石川県金沢市）**天徳院**は、元和九年（一六一三）、加賀三代藩主前田利常が内室天徳院（将軍秀忠息女）菩提のために建立、開山は巨山泉滴。明和五年（一七六九）に回禄に遭い焼失、その後、まもなく復興。次に金沢五代藩主前田綱紀は、元禄六年（一六九三）、月坡と道交のあった高泉性激に委嘱し伽藍を「明様式」に改築した。ところが明和五年（一七六八）に回禄に帰す。翌六年に本堂、庫裡等を再建。現在、「葫蘆様釜」（県指定有形文化財）、「醤卓」（市指定文化財）と往時の山門（同上）楼上に「明様羅漢像」が残る。

越中**高岡瑞龍寺**の伽藍（国宝〔仏殿・法堂・山門〕、鎌倉建仁寺様）、加賀藩三代藩主前田利常の建立。仏殿（仏殿棟札は万治二年記）額字「大雄殿」は隠元筆。「瑞龍寺鐘銘」も隠元撰である。さらに横山秀哉氏の研究によれば、以下「明様式」の諸寺院の伽藍例がある。

山門例として（一）大阪府池田市大廣寺の山門、萬福寺総門形式三棟制を採用。（二）宇治興聖寺の山門、崇福寺山門に類似する龍宮造り。仏殿例として（一）宮城県仙台市洞雲寺仏殿の構成と意匠、萬福寺の仏殿を模倣。（二）東京世田谷区豪徳寺仏殿、崇福寺に類似。他にも後掲のごとく数例（祇園寺・双林寺・貞祥寺・丈六寺）がある。

とりわけ僧堂が元禄宝永年間（一六八八～一七一〇）頃から坐禅堂化・斎堂化〔庫裡の広間に飯台座〕したことが「清規」の上でも、その変化が大きいといえる。その他の例として、元禄二年（一六八九）、一五世如実秀本による江戸青松寺の黄檗式斎堂建立。寛政六年（一七九四）頃の上野白井双林寺は禅堂と衆寮が左右に並列して建立。文政元年（一八一八）の近江彦根清涼寺の百人詰大僧堂は衆寮と一つ家の建物として建立されたこと等が指摘されている。

信濃洞源山貞祥寺は、双林寺と同様に庫裡は衆寮配置の関係上、本堂と並立となっていることが特徴であり、阿波丈六寺は、天台宗の浄楽寺から、永正年中（一五〇四～〇七）に金岡用兼（一四三六～一五一三）を請し中興開山として迎え、瑞麟山丈六寺と曹洞に改宗。伽藍配置として山門・本堂・観音堂の三棟は室町期に属する古建築が保存されている。

参考文献

横山秀哉『禅宗建築の研究』第一二章、第二八節「常陸祇園寺と寿昌派の建築」、第二九節「黄規の影響とその模倣」、第三〇節「上野双林寺とその伽藍配

（一七）

置」、第三一節「信濃貞祥寺・阿波丈六寺その他」、『東北大学建築学報』一、一九五二・一九五三年。同右『禅の建築』第一章、五「黄檗寺院の進出」、第四章、一〇「僧堂と禅堂」、一一「衆寮と学寮」、一二「庫裡と斎堂」、彰国社、一九六七年。

第八、「墨蹟」を珍重する風習の流行

鎌倉時代（中国では南宋代）以降、栄西禅師や道元禅師などにより宗派として禅宗が興起し、その信仰が日本人各層に浸透していく。同時に「頂相」や「山水画」の絵画（宋元画）、「語録」「法語」や「真跡」（墨蹟）類が日中両国僧の往来で多数伝来し、それは室町時代にも引き継がれ、作庭や能楽・茶道等にもおよび、それらは周知のごとく一般に「禅文化」とも称される。中でも「墨蹟」は、利休等により「茶道」の茶室における床の間の掛け軸に用いられ、それが現代にもおよび一般人の人気がある。それらの契機は、江戸時代の黄檗僧による「墨蹟」の普及も大きく寄与しているといえよう。

「黄檗三筆」（隠元・木庵・即非）三人の墨蹟が珍重され、次いで独湛、高泉、千呆、悦翁等が続く。寿昌派東皐心越も独特な「隷書」を得意とする。彼は「画」も描き、七弦琴、篆刻の名手でもある。「明風」書流の代表格として董其昌（一五五五～一六三六）や傅山（一六〇七～八四）などが挙げられ、その書風を費隠通容（一五九三～一六六一）が完成し、それを禅法と共に隠元が継承し、黄檗山二代木庵、さらに七代悦翁まで続く世代は書風をも「嫡々相承」して黄檗墨蹟を特徴付けているとされる（中島晧象『書道史より見る禅林の墨蹟』）。木庵の書は、洒脱な趣をさりげない筆に乗せて吐露した作品が多く、特に大字作品を得意とした。また即非の書は、最も筆力が強く、激しい動きを見せる（前掲書、三二三頁）、と表される。特に彼らの墨蹟は、洞門寺院住職の評判になり、特に山号・寺号の額や諸堂の扁額を要請され、それが流行になっていく。やがて、それは後掲の洞門僧月舟宗胡や卍山道白等にも自然と要請されるようになったと思われる。

次に『文化財』より主だった宗門寺院の山号額・寺号額等の扁額を染筆した黄檗僧と寿昌派僧と比較的多い洞門僧の月舟・卍山・無得・玄楼・玄透・無学に限定し挙げてみよう。

三重　**常安寺**　隠元隆琦筆「獅子吼」三字書・扁額、寛文一二年（一六七二）書。高泉性激筆「常安寺」寺号額〔彫刻〕。五世龍巌祖曇・六世鉄壁巌州・七世融峰雄祝代。

三重　**東雲寺**　独湛性瑩筆「金剛」二字書、扁額。玄透筆「東雲寺」寺号額〔彫刻〕。高泉・即非如一等の墨蹟。開山黙子素淵・二世頑極官慶は黄檗禅傾倒者。

静岡　静居寺　東皐心越筆「東海法堀（窟）」扁額〔彫刻〕。東皐と天桂伝尊との道交。

静岡　石雲院　月舟宗胡筆「大円覚」三字額〔彫刻〕

静岡　福王寺988　東皐筆「法輪常転」四字額

愛知　西明寺　月舟筆「西明寺」寺号額〔彫刻〕

佐賀　龍泰寺　即非如一筆「龍泰寺」寺号額〔彫刻〕。一〇世快岩天鷲代か。

佐賀　**円応寺**　木庵性瑫筆「円応禅寺」寺号額、万治三年（一六六〇）筆。『西溟余稿二』「松雲宗融伝」には、「庵書円応寺三大字以遺之」とあり、「禅」の字を欠く。普門山」山号額、「選仏場」本堂額（元は僧堂額か）、解説には木庵筆の明示なし。

長崎　晧台寺　東皐筆「常詠（寂）光」三字書、扁額。〈言偏に上・小、寂の古字〉

長崎　天祐寺　月舟筆「福聚海」山門額〔彫刻〕

長崎　菩提寺　木庵筆「菩提禅寺」、即非筆「医王殿」、柏岩筆「大門」額。「菩提寺世代天瑞和尚伝」（『菩提寺世代伝』所収）の記事に所載。『文化財3』に記載なし。

大分　長松寺　千呆筆「長松寺」寺号額〔彫刻〕。独吼の墨蹟「七言絶句」もあり。

大分　**瑞泉寺**　悦山道章筆「青（大字）松不碍人来往、緑乃無心自去留」扁額、即非筆「□着」二字書、扁額。開山碧外鷲岳。

香川　**見性寺**　即非筆「直指山」山号額・東皐筆「海嶠禅林」扁額〔彫刻〕。

一四世徳厳養存との道交。木庵より徳厳宛書状もあり。

岡山　定林寺　東皐筆「玉叟山」山号額〔彫刻〕

岡山　法泉寺　木庵筆「金毛窟」横額〔彫刻〕

岡山　洞雲寺　玄楼奥龍筆「真常殿」横額〔彫刻〕、「方丈」横額〔彫刻〕

岡山　円通寺　月舟筆「幽玄」高方丈額〔彫刻〕、卍山道白筆「廓然」横額〔彫刻〕、玄透即中筆「定規告諭」一面〔彫刻〕

岡山　長川寺　月舟筆「長川寺」寺号額〔彫刻〕

広島　香積寺　月舟筆「香積寺」寺号額、横額〔彫刻〕

広島　洞雲寺　玄楼筆「真常殿」一面〔彫刻〕

広島　天寧寺　月舟筆「海雲山」山号額、横額〔彫刻〕

広島　賢忠寺　高泉筆「南陽山」山号額、横額〔彫刻〕

広島　千手寺　玄透筆「庫院」、横額〔彫刻〕、「当午庵」横額〔彫刻〕、霊源素皎筆「華谷山」山号額、横額〔彫刻〕、筆者不明「千手寺」寺号額〔彫刻〕

山口　禅昌寺　東皐筆「亀岳林」横額〔彫刻〕、無学筆「法幢山」山号額。月舟筆「最□関」横額〔彫刻〕・「高源院」横額〔彫刻〕

山口　瑠璃光寺　林道栄（大通詞）筆「保寧山」山号額、横額〔彫刻〕、月舟筆「選仏場」僧堂額、横額〔彫刻〕、筆者不明「山陽法窟」玄関額、横額〔彫刻〕

山口　海潮寺　張即之筆「梅檀林」横額〔彫刻〕。南宋代の書家張即之の筆。

山口　**大寧寺**　無得良悟筆「大寧護国禅寺」寺号額、無隠道費筆「瑞雲山」山号額、横額〔彫刻〕・聯二面〔彫刻〕。

島根　**洞光寺**16　東皐筆「洞光寺」寺号額、月舟筆「金華山」山号額、慧門禅智筆「淘沙台」庫院額、いずれも横額〔彫刻〕。

島根　洞光寺58　月舟筆「金剛窟」額、大夤（北野）元峰筆「洞光禅寺」寺号額。

島根　永明寺　東皐筆「覚皇山」山号額〔彫刻〕

鳥取　大岳院　月舟筆「萬祥山大岳院」（三字二行書）墨蹟一幅。山号・寺号用か。

滋賀　清涼寺　東皐筆「清涼禅寺」寺号額〔彫刻〕

滋賀　**青龍寺**　月舟筆「江南山」山門・本堂額、「青龍寺」寺号額、木庵筆「法王」法堂額、以上全て〔彫刻〕。木庵、即非、独吼の墨蹟あり、五世秀岩龍田の在住時か。

滋賀　青岸寺　月舟筆「青岸寺」寺号額〔彫刻〕

滋賀　洞寿院　悦山筆「塩谷山」山門額〔彫刻〕

滋賀　正伝寺　月舟筆「選仏場」〔彫刻〕、北野元峰筆「霊薬山」山号額〔彫刻〕

京都　桂林寺　月舟筆「選仏場」禅堂額〔彫刻〕、益之万孚筆「盛林寺」寺号額

京都　盛林寺　月舟筆「座睡軒」扁額一枚、墨蹟であるが、「軒号額」字。

奈良　慶田寺　月舟筆「宝陀山」山号額、風山周雲筆「円通閣」本堂額〔彫刻〕

大阪　伊勢寺　東皐筆「伊勢寺」寺号額〔彫刻〕

大阪　広見寺　隠元筆「大林山」山号額〔彫刻〕

大阪　陽松庵　東皐筆　聯字対幅、天桂筆「退蔵峰」本堂額・「肉暖」開山堂額。

大阪　霊松寺　月舟筆「黄牛山」山号額・「霊松寺」寺号額、筆者不明「方丈」額

兵庫　太寧寺　月舟筆「太寧寺」寺号額、筆者不明「神護山」山号額〔彫刻〕

兵庫　景福寺　東皐筆「宝鏡三昧」額、月舟筆「円通」額〔彫刻〕

栃木　海潮寺　東皐筆「無字偈（七言二句）」扁額一面〔彫刻〕

栃木　**大中寺**　東皐筆「道林法席」横額一面〔彫刻〕、二二世連山交易との道交。

栃木　**海潮寺**　東皐の扁額「七言二句」、山内に隠元の墨蹟あり。

茨城　**祇園寺**　東皐筆「得参摩提」（僧堂額か）横額〔彫刻〕・「無尽法蔵」観音堂内扁額、鰲山見雪筆「無尽灯」横額。

群馬　双林寺　月舟筆「双林寺」寺号額〔彫刻〕、無学筆「最大山」山号額〔彫刻〕

群馬　補陀寺　月舟筆「大仙院」山号額・「補陀禅林」寺号額・「関左法窟」山門額。

千葉　正泉寺　東皐筆「法宝蔵」扁額一面〔彫刻〕

千葉　妙泉寺　月舟筆「妙泉寺」寺号額〔彫刻〕

埼玉　鳳林寺　木庵筆「長慶山」山号額〔彫刻〕・「鳳林寺」寺号額〔彫刻〕

埼玉　広見寺　東皐筆「大林山」山号額〔彫刻〕

埼玉　龍穏寺　無学筆「龍穏寺」寺号額〔彫刻〕
埼玉　正龍寺　月舟筆「正龍寺」寺号額〔彫刻〕、巨海東流筆「藤田禅林」横額一面。
埼玉　光源院　月舟筆「祖師堂」額〔彫刻〕
山梨　長生寺　月舟筆「大儀山」山号額（開創五百年記念新刻もあり）二枚。
山梨　法泉寺　無学筆「大龍山」山号額〔彫刻〕
山梨　宝鏡寺　月舟筆「趙州無字」聯額〔彫刻〕
長野　**岩松院**　悦峰道章筆「梅洞山」・「岩松院」山号・寺号額〔彫刻〕・「放参」牌。
長野　大昌寺　月舟筆「大昌寺」寺号額〔彫刻〕
長野　西福寺　高泉筆「栴檀林」扁額一枚〔彫刻〕
長野　興隆寺　喝禅道和筆「禅悦堂」斎堂扁額〔彫刻〕。喝禅（一六三四～一七〇七）は木庵の法嗣。八世雪山石瑞（一七〇四没）代か。彼は悦峰とも道交。『文化財7』七八頁。
長野　貞祥寺　月舟筆「枯木堂」禅堂扁額〔彫刻〕
長野　長興寺　月舟筆「青松山」山門額〔彫刻〕。墨蹟より印字。
山形　**林泉寺**　隠元筆「方丈」二字書、扁額〔彫刻〕。月舟筆「春日山」山号額・「林泉寺」寺号額の草紙（墨蹟）。卍山筆「選仏場」墨蹟。いずれ扁額にするもの。
富山　**瑞龍寺**　隠元筆「高岡山・瑞龍寺」山号・寺号額、「大雄殿」仏殿額。当該寺院には隠元筆万治二年撰「越中州高岡山瑞龍禅寺鐘銘」一幅と原物の鐘銘あり。富山　自得寺　月舟筆「黄金閣」（墨蹟としてあるが、建造物の扁額用と思われる）
石川　大乗寺　月舟筆「金獅峰」山号額・「大乗護国禅寺」寺号額・「選仏場」僧堂額、卍山筆「東香山」山号額、密山筆「大雄殿」仏殿額・山門聯句。林道栄筆「山号額」東・香・山の三枚対幅・「松擁寿林大乗法興護国寺」
石川　**天徳院**　高泉筆「残紫秋霜」扁額一枚・「菅氏大宗祠」扁額一枚、高泉筆聯二面、隠元筆「墨蹟」、木庵手択の払子・竹如意あり。世代に鉄心・龍睡・月坡等在住。
新潟　宝光寺　木庵筆「大法蔵」扁額一面〔彫刻〕、月舟筆「選仏場」〔彫刻〕
新潟　種月寺　月舟筆「福地山」「鼓缶軒」「種月寺」〔彫刻〕
新潟　雲洞庵　月舟筆「選仏場」〔彫刻〕、密山道顕筆「雲洞護国禅庵」〔彫刻〕
新潟　福勝寺　無準師範筆「選仏場」僧堂額〔彫刻〕、無学筆「福玉舎」本堂額〔彫刻〕。臨済宗楊岐派無準（一一七九～一二四九）の墨蹟、入手経路不明。東福寺円爾の線か。
福島　天沢寺　無学筆「獅子窟」三字額〔彫刻〕・「聯芳堂」三字額〔彫刻〕

各種の扁額・聯は、山門や仏殿・本堂（法堂）・僧堂・経蔵等の表に掲げられ、山内に入る者の視線に入る。そこで当該寺院が有名な黄檗僧や洞門僧との道交をあらわすと同時に寺院住職のステータス（格式）を示す道具立てになっているともいえよう。

次に同じく『文化財』より黄檗僧の墨蹟と寿昌派東皐心越や蘭山道昶の墨蹟（絵画やその賛を含む）や資料を所有する洞門寺院の一部を挙げてみよう。太字の寺院は、三点以上の墨蹟を有する寺院を表わす。また数字は、同名寺院の寺籍番号を示す。

□黄檗宗

為霖道霈墨蹟　長崎晧台寺、福岡**明光寺**、神奈川最乗寺、石川**大乗寺**
道者超元墨蹟　長野**海応院**、岡山円通寺、兵庫**花岳寺**、**駒大禅博**
隠元墨蹟　山形**善宝寺**、同宗泉寺、秋田**天徳寺**、福岡**明光寺**、大分豊音寺、長崎菩提寺、岡山洞松寺、神奈川最乗寺、石川**大乗寺**、同天徳院、長野**海応院**、同**岩松院**、栃木海潮寺、山梨法泉寺、広島**賢忠寺**、鳥取景福寺、滋賀**正伝寺**、京都盛林寺、大阪**大広寺**、奈良不動寺、和歌山**延命寺**、兵庫永天寺、三重常安寺、**駒大禅博**〈図4〉
木庵墨蹟　岩手**報恩寺**、山形**善宝寺**、同総光寺、秋田妙覚寺、同**天徳寺**、岡山長川寺、同大通寺、同法泉寺、鳥取瑞仙寺、山口洞海寺、香川**見性寺**、長野**海応院**、同**岩松院**、同西福寺、埼玉鳳林寺、山梨長生寺、広島**賢忠寺**、滋賀**青龍寺**、同**青岸寺**、同**正伝寺**、和歌山**延命寺**、兵庫**花岳寺**、同永澤寺、愛知普

済寺、北海道龍雲院。〔開創は寛文二年〈一六二五〉〕、同正覚院〔開創は寛永八年〈一六三一〉〕、**駒大禅博**〈図5〉

即非如一墨蹟　秋田**天徳寺**、山形**善宝寺**、福岡**明光寺**、島根松源寺、鳥取松源寺、滋賀**青龍寺**、群馬補陀寺、長野長国寺、長野**海応院**、香川**見性寺**、和歌山**延命寺**、三重**東雲寺**、**駒大禅博**

慧林性機墨蹟　兵庫永天寺、滋賀**青岸寺**

独湛性瑩墨蹟　静岡龍巣院、長野貞祥寺、愛知妙厳寺、三重東雲寺、滋賀青岸寺

大潮元皓墨蹟　山口大寧寺、島根松源寺

高泉性激墨蹟　宮城**輪王寺**、熊本大慈寺、群馬双林寺、千葉長安寺、栃木海潮寺、茨城祇園寺、長野**長興寺**、石川豊財院、同天徳院、福井**龍泉寺**、富山永安寺、山口禅昌寺、兵庫花岳寺、滋賀正伝寺、京都正眼寺、同久昌寺、大阪伊勢寺、三重**東雲寺**、同常安寺

悦山道宗墨蹟　岩手**報恩寺**、秋田鱗勝院、鳥取景福寺、京都久昌寺、富山永安寺、長野**海応院**、同**長興寺**、富山永安寺、同大川寺、滋賀洞寿院

慧極道明墨蹟　岩手**報恩寺**

悦峰道章墨蹟　島根洞光寺、長野**興隆寺**、同岩松院

大鵬正鯤墨蹟　山口大寧寺、島根松源寺

鉄眼道光墨蹟　福井**龍泉寺**

独吼性獅墨蹟　滋賀**青龍寺**、大分長松寺

潮音道海墨蹟　埼玉西光寺、長野**海応院**

鉄牛道機墨蹟　栃木大雄寺、宮城**輪王寺**、**駒大禅博**

独立性益墨蹟　大阪**大広寺**、石川**大乗寺**、広島**賢忠寺**

独照性円墨蹟　京都正眼寺、岡山円通寺、石川**大乗寺**

杲堂元昶墨蹟　神奈川東泉院。〔杲堂（一六六三～一七三三）は悦峰の法嗣、萬福寺一二代〕

種同墨蹟　長崎東光寺。〔種同の行実不明〕

大翁墨蹟　宮城**輪王寺**。〔大翁の行実不明〕

林道栄筆　石川**大乗寺**。〔林（一六四〇～一七〇八）唐通詞、書家、詩人〕

□曹洞宗寿昌派

東皐墨蹟　栃木海潮寺、同大雄寺、茨城**祇園寺**、群馬光厳寺、山梨海潮寺、同宝鏡寺、埼玉広見寺、山形**善宝寺**、秋田妙覚寺、佐賀円応寺、同龍雲寺、宮崎妙光寺、長野広沢寺、福井**龍泉寺**、山口禅昌寺、島根洞光寺58、同洞光寺16、岡山定林寺、香川**見性寺**、奈良不動寺、兵庫景福寺、同**花岳寺**、滋賀**清涼寺**、大阪伊勢寺、同**大広寺**、同陽松庵、静岡静居寺、愛知大泉寺、岐阜大禅寺、北海道正覚院。〔開創寛永八年〈一六三一〉〕。

蘭山道昶　京都盛林寺。〔寿昌派僧蘭山（＊～一七五六）は呉雲法曇の法嗣、天徳寺三世〕。

洞門僧の墨蹟は、月舟をはじめ卍山、面山、三洲、逆水、天桂、玄楼、玄透、父幼、無学、大愚等々、あまりにも多数のためすべて除外した。

渡来した黄檗僧の大半および寿昌派の東皐などは、「詩書画三絶」（詩文・墨蹟・図画）の文人と称される。前述のごとく東皐は、その上に七弦琴の名手兼作曲もでき、篆刻等多芸多才な人物であった。臨済僧や洞門僧もそれに憧れ、自分もそれに近づこうとするのは自然である。山水や花鳥、仏菩薩阿羅漢祖師の人物（道釈画）、各種の逸話などを墨絵（水墨画）や淡彩画を試みた禅僧も大勢いる。これらも黄檗文化の顕著な影響といえよう。具体的人物を挙げると枚挙に暇がないほどであるが、人物や作品に関して、本稿では指摘するに留め、すべて割愛しておきたい。

おわりに

江戸期、停滞気味の仏教界に飽きたらず、曹洞宗の僧侶が黄檗宗の異国情緒溢れる斬新な宗風と多才な黄檗僧に魅かれ接近し、様ざまな影響を受けた側面を整理してみよう。

まず思想面において中国や日本を問わず、また禅宗に限らず他の宗派でも法系・嗣法を重視することは論を俟たない。それは各人の自覚や誇りを確保することに繋

がるからである。乱脈を嘆き、その是正を志向する明代僧永覚の著書『洞上古轍』や為霖との文通（長崎出島の船便）により感化されたのが独庵である。それを著書『護法集』で強調、憂国の士万安や連山、他の諸師も共鳴し、その革正思想が起点となり、卍山と梅峯が中心となり「宗統復古」運動が惹起。元禄一六年「一師印証、面授嗣法」の裁定が幕府より下り成就したのである。

また『黄檗清規』の浸透が金沢大乗寺の月舟と卍山にも及び、その影響を受けて『椙樹林清規』が成立する。それに対し面山や玄透等が黄檗色を批判し『永平清規』や『瑩山清規』の源流に還るべく「古規復古」を主張し、その革正運動に尽力した。禅堂から本来の僧堂の復帰を果たしたのも、その一環である。木魚は読経の際、便利なこともあり、抵抗なく受容した。

さらに隠元や木庵の「黄檗戒壇」の盛況に刺激され、洞門僧侶が登壇受戒し、黄檗式授戒会を興行する者もいた。惟慧道定による岐阜善応寺の「授戒会」や隠之道顕による下総東昌寺・武府妙喜寺等の「授戒会」である。その後、その批判もあり、洞門僧侶は道元禅師以来の「授戒会」に収斂し、それが各地に展開し栄えていくようになる。

黄檗寺院を訪問して筆談を通し問答を交わし、さらに進んで安居掛錫し、時に役職に就任、果てには転宗する者が現れても不思議はない。勿論、周囲から注意され留まる者もいた。徳翁や無得、雲山などはその例である。天産霊苗は、語学力を鍛え、悦峰道章の江戸行きに同行し、将軍の通訳を務めたほど有能な人物であるが、主体的に宗門に留まったのである。

明代黄檗僧を中心とする正面向きの「頂相」が写実的で迫真性があることに、洞門僧侶は一種の文化的ショックを受けたのではなかろうか。当初、絵師（僧侶も含む）は試行錯誤の過程を経て、次第に正面向き「肖像」の描写ができるようになり定着した。ところで現代では、元来あった祖師の「木像」製作は激減ないし絶滅状態であり、「頂相」も「写真」に移り変わりつつある、といってよかろう。その歴史や文化は、今後、どのようになるのか。

「明様式（黄檗様）伽藍」の流行は、全国的に言えば宗門の一部に過ぎず、それ

も財力が伴うため外護者は大名寺院などに限られていた。常陸祇園寺は水戸光圀、加賀天徳院は前田綱紀、越中瑞龍寺は前田利常の創建と各藩の藩主であった。また伽藍の一部である山門や仏殿の建立も主に地方の有力寺院であり、一般寺院では容易に建立できない面があった。

「黄檗三筆」として、その墨蹟は隠元の「徳」、木庵の「道」、即非の「禅」の人と称され、悦山を加えて四人が代表的である。その書は、いずれも太く豪快で心を打つものがある。月舟や卍山の書〈図6・7・8〉は、多分にその影響がみえる。黄檗僧・寿昌派僧の墨蹟が各地宗門寺院の山門・仏殿等の扁額や聯に掲げられたりしている例を全国的にいくつか挙げた。また黄檗僧の墨蹟を所蔵する洞門寺院の分布を示した。各々そこに洞門僧と檗門僧の人的交流（道交）と各寺院が何らかの接触があり所蔵された歴史があったのである。残念ながらそれを示す文書類がわずかしかなく、ほとんど不明である。若手研究者が、今後それらの地域・寺院と人物を結びつける手がかりを精査できれば、さらに立体的になり、道交の実態が具体的に明らかになるであろう。その点に期待を抱きたい。

（よしだ　どうこう　愛知学院大学名誉教授）

（編集部注）本稿は平成二八年一〇月二七日、第三六回禅文化歴史博物館セミナー（於駒澤大学中央講堂）として行われた吉田道興先生のご講演をもとに、吉田先生にご寄稿いただいたものです。吉田先生には謝して御礼申し上げます。

図1　無隠道費自賛画像　島根瑞巌寺旧蔵

図2　隠元騎獅像　喜多宝雲画　愛知東輪寺蔵

図3　黄檗即非頂相　喜多元規画、千呆性佺賛、天和三年　駒大禅博蔵

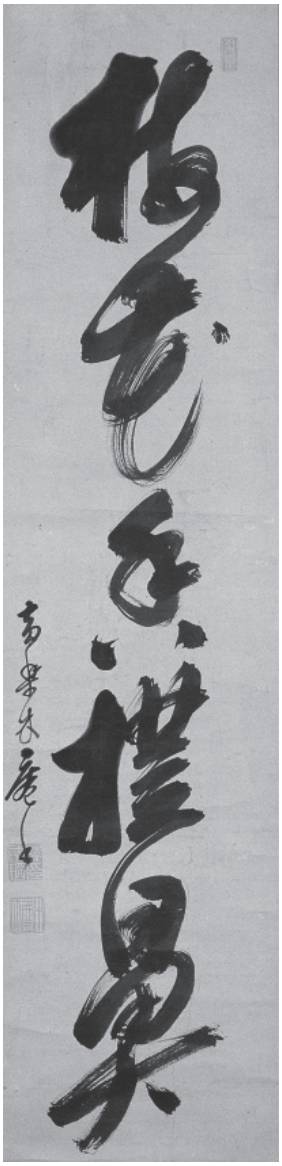

図5　木庵性瑫墨蹟　一行書「梅花香撲鼻」　駒大禅博蔵

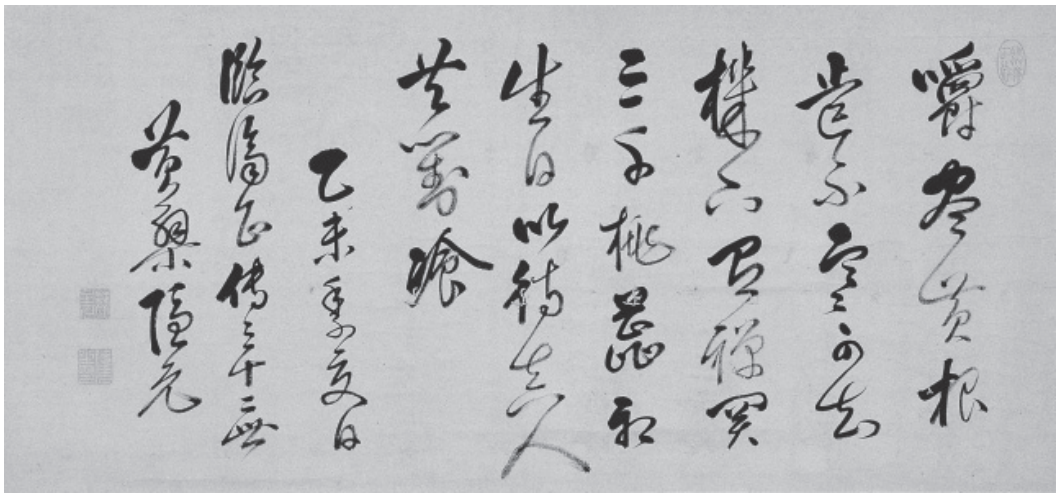

図4　隠元隆琦墨蹟　七言絶句　寄贈和尚扶桑之行　駒大禅博蔵

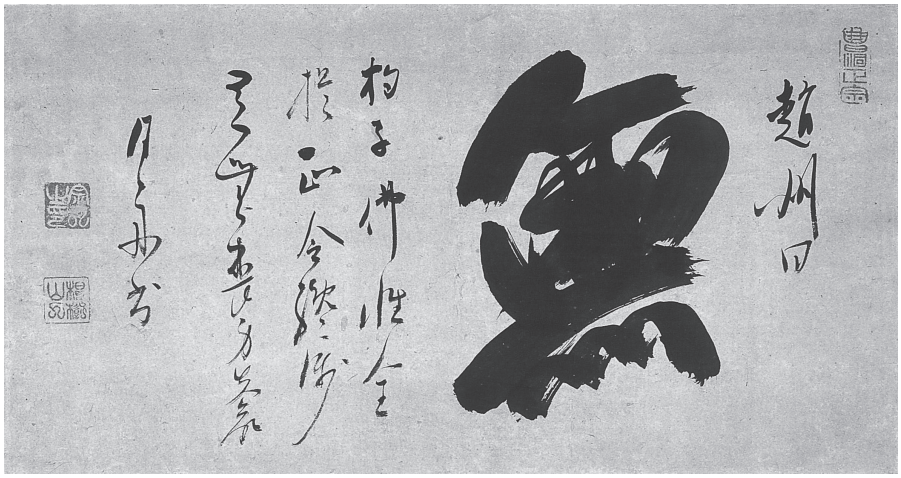

図6　月舟宗胡墨蹟　趙州無字公案　駒大図書館蔵

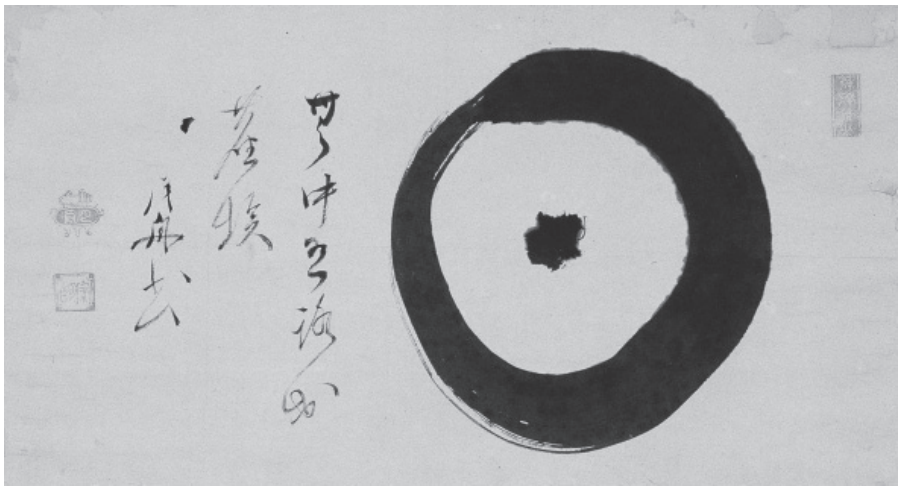

図7　月舟宗胡墨蹟　円相　駒大禅博蔵

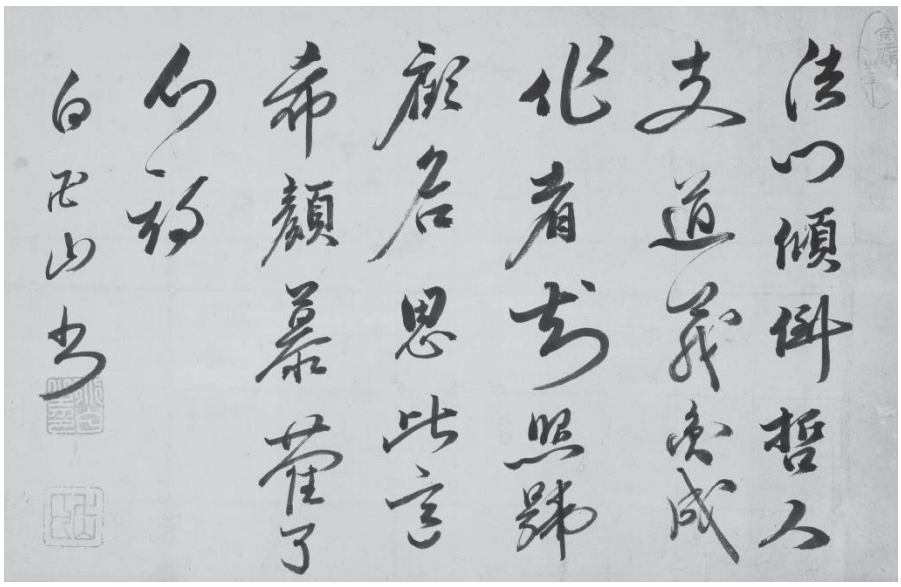

図8　卍山道白墨蹟　七言絶句　駒大図書館蔵

（二二五）